

甲斐市文化財調査報告書 第20集
(山 梨 県)

末 法 遺 跡 V・VI

宅地造成工事及び集合住宅造成工事に伴う

古墳時代の発掘調査報告書

2012

甲 斐 市 教 育 委 員 会

甲斐市文化財調査報告書 第20集
(山 梨 県)

末 法 遺 跡 V・VI

宅地造成工事及び集合住宅造成工事に伴う
古墳時代の発掘調査報告書

2012

甲 斐 市 教 育 委 員 会



1. 第5次 石製紡錘車



2. 第6次 小型丸底壺

序 文

甲斐市の東部は、金峰山に源を持つ荒川によって造られた扇状地形となっており、この扇状地上には縄文時代から連綿と人々の生活が営まれていたことが近年の発掘調査によって明らかとなっています。この中には居住域、墓域、濠跡が明確になった弥生時代の「金の尾遺跡」や金銅製の小型仏像や螺髪、円面硯、帯金具など古代の政治や文化色が強く出された遺物が出土している「松ノ尾遺跡」など重要な遺跡が点在していることから、山梨県の歴史を学習する上でも注目される地域となっています。

今回報告します末法遺跡の発掘調査では、古墳時代の住居跡や生活に使われた土器などが発見され、新たな歴史資料を得ることができました。

近年この地域では頻繁に開発が行われるようになり埋蔵文化財の保護が急務となってきております。今後は調査で得られました成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に地権者をはじめ、関係者各位のご理解、ご協力に感謝申し上げます。

平成24年3月

甲斐市教育委員会

教育長 河 野 文 彦

例 言

1. 本書は、山梨県甲斐市大下条412-1 外に所在する末法遺跡第5次発掘調査報告書並びに山梨県甲斐市大下条383外に所在する末法遺跡第6次発掘調査報告書である。
2. 調査原因及び面積は次のとおりである。

第5次調査……株式会社泰栄企画による宅地造成工事に伴い実施された。調査面積は造成工事内の公道建設予定地155㎡である。

第6次調査……中込はな子による集合住宅建設、造成工事に伴い実施された。調査面積は造成工事内の公道建設予定地96㎡である。
3. 発掘調査及び整理分析調査期間

第5次調査 平成23年2月8日から同年3月2日（発掘調査）
平成23年5月から同24年3月（整理分析調査）

第6次調査 平成23年5月25日から同年6月30日（発掘調査）
平成23年8月から同24年3月（整理分析調査）
4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者 甲斐市教育委員会

調査担当者 大寫正之（甲斐市教育委員会教育部生涯学習文化課）
須長愛子（甲斐市教育委員会教育部生涯学習文化課）

調査事務局 甲斐市教育委員会教育部生涯学習文化課文化財係

調査協力員 上野光雄、立花重光、高添美智子、堤吉彦、羽中田 勲、日向充雄
古屋秀雄、森沢篤美、望月典子、横内 博、田中明日香
5. 本書の執筆、編集及び遺構、遺物の写真撮影は大寫が行った。整理分析調査における遺物実測、トレース、図版作成は大寫の指示のもと高添美智子、望月典子、田中明日香が行った。
6. 調査に係る費用の負担は次のとおりである。

第5次調査……手塚まもる氏（地権者） ・ 第6次調査……中込はな子氏（地権者）
7. 報告書作成にあたり、山梨県埋蔵文化財センターの保坂和博氏、小林健二氏よりご教示を賜った。ご芳名を記しお礼申し上げる。
8. 末法遺跡第5次・6次各調査における出土遺物及び記録図面、写真資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 挿図の縮尺は5次調査住居跡1／40、6次調査住居跡1／60、土坑跡1／40
2. 出土遺物観察表の計測値のうち、（ ）内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」と記した。
3. 遺物番号は本文、挿図、観察表で統一してある。
4. 報告書使用の地図は、甲斐市都市計画地図を使用した。

本文目次

序文

例言・凡例

目次

第1章 遺跡をとりまく環境

- 1. 遺跡の立地と環境…………… 1
- 2. 末法遺跡とその周辺…………… 1

第2章 第5次調査 遺構と遺物

- 1. 基本層位…………… 5
- 2. 住居跡…………… 5
- 3. 土坑跡……………11
- 4. 窪地……………12
- 5. 遺構外遺物……………14

第3章 第6次調査 遺構と遺物

- 1. 基本層位……………15
- 2. 住居跡……………15
- 3. 土坑跡……………21
- 4. 遺構外遺物……………21

第4章 まとめ……………22

報告書抄録

挿図目次

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 第1図 末法遺跡と周辺の遺跡…………… 2 | 第15図 第6次1号住居跡出土遺物……………17 |
| 第2図 第5・6次調査区位置図…………… 3 | 第16図 第6次1号住居跡出土遺物……………18 |
| 第3図 第5次調査区全体図…………… 4 | 第17図 第6次3号住居跡出土遺物……………18 |
| 第4図 第5次1号住居跡…………… 6 | 第18図 第6次3号住居跡出土遺物……………19 |
| 第5図 第5次1号住居跡出土遺物…………… 7 | 第19図 第6次4号住居跡出土遺物……………19 |
| 第6図 第5次2号住居跡…………… 9 | 第20図 第6次2号住居跡……………20 |
| 第7図 第5次2号住居跡出土遺物……………10 | 第21図 第6次2号住居跡出土遺物……………21 |
| 第8図 第5次1号土坑跡・出土遺物……………11 | 第22図 第6次1号土坑跡……………21 |
| 第9図 第5次窪地1……………12 | 第23図 第6次遺構外遺物……………21 |
| 第10図 第5次窪地1出土遺物……………12 | 第24図 第2次1号住居跡出土遺物……………24 |
| 第11図 第5次窪地3・出土遺物……………13 | 第25図 第2次1号住居跡出土遺物……………25 |
| 第12図 第5次遺構外出土遺物……………14 | 第26図 第2次3号住居跡出土遺物……………25 |
| 第13図 第6次調査区全体図……………16 | 第27図 第2次4号住居跡出土遺物……………26 |
| 第14図 第6次1・3・4号住居跡……………17 | |

目 次

第1表	第5次1号住居跡出土遺物観察表……………	8	第7表	第6次1号住居跡出土遺物観察表……………	18
第2表	第5次2号住居跡出土遺物観察表……………	8	第8表	第6次3号住居跡出土遺物観察表……………	19
第3表	第5次1号土坑跡出土遺物観察表……………	11	第9表	第6次4号住居跡出土遺物観察表……………	20
第4表	第5次窪地1出土遺物観察表……………	12	第10表	第6次2号住居跡出土遺物観察表……………	21
第5表	第5次窪地3出土遺物観察表……………	13	第11表	第6次遺構外出土遺物観察表……………	21
第6表	第5次遺構外出土遺物観察表……………	14			

写真図版目次

図版1-1	第5次	調査区全景	東から	図版5-24	第5次	1号住居跡-7
図版1-2	第5次	調査区全景	西から	図版5-25	第5次	1号住居跡-8
図版2-3	第5次	1号住居跡	北から	図版5-26	第5次	1号住居跡-11
図版2-4	第5次	2号住居跡	南から	図版5-27	第5次	2号住居跡-3
図版2-5	第5次	1号土坑跡	東から	図版5-28	第5次	2号住居跡-4
図版2-6	第5次	窪地1	北から	図版5-29	第5次	2号住居跡-6
図版2-7	第5次	窪地3	東から	図版5-30	第5次	1号土坑跡-1
図版2-8	第5次	第2トレンチ	南から	図版5-31	第5次	窪地3-1
図版2-9	第5次	第3トレンチ	南から	図版6-32	第5次	遺構外-1
図版2-10	第5次	第2トレンチ遺物出土状況		図版6-33	第5次	遺構外-2
図版3-11	第6次	調査区全景	東から	図版6-34	第6次	1号住居跡-1
図版3-12	第6次	1号住居跡	西から	図版6-35	第6次	1号住居跡-2
図版3-13	第6次	2号住居跡	東から	図版6-36	第6次	1号住居跡-3
図版3-14	第6次	3号住居跡	南から	図版6-37	第6次	1号住居跡-4
図版3-15	第6次	4号住居跡	南西から	図版7-38	第6次	1号住居跡-6
図版4-16	第6次	1号住居跡遺物出土状況		図版7-39	第6次	3号住居跡-1
図版4-17	第6次	1号住居跡遺物出土状況		図版7-40	第6次	3号住居跡-3
図版4-18	第6次	1号住居跡遺物出土状況		図版7-41	第6次	3号住居跡-4
図版4-19	第6次	2号住居跡遺物出土状況		図版7-42	第6次	3号住居跡-6
図版4-20	第6次	3号住居跡遺物出土状況		図版7-43	第6次	4号住居跡-1
図版4-21	第6次	3号住居跡遺物出土状況		図版7-44	第6次	4号住居跡-2
図版4-22	第6次	粘土塊出土状況		図版7-45	第6次	遺構外-1
図版4-23	第6次	調査風景				

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

甲斐市は甲府盆地の北西部に位置し、東側が甲府市、西側が韮崎市に接する。市内は地形の特徴から4つの地域に分けることができる。

まず、市内の北部は茅ヶ岳、曲岳、太刀岡山など標高千メートルを超す山々が点在する山岳地帯で、急峻な地形を呈している。市中西部は黒富士、茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がり、通称「登美台地」、「赤坂台地」と呼ばれる茅ヶ岳南麓の丘陵地帯となる。市東部は奥秩父山系の金峰山を源とする荒川が流れ、この荒川によって形成された扇状地域となり、市南部は赤石山脈（南アルプス）鋸岳を源とする釜無川によって形成された扇状地域となる。

以上のように甲斐市域は北部から中西部にかけて山間地、丘陵地帯となり、東部から南部にかけて扇状地を形成する。市内の標高は、最高地点が金ヶ岳頂上の1750メートル、最も低い地点が南部玉川地域の265メートルで、標高差は1400メートルを超える。このように標高の高低差が著しく、地形もバリエーションに富むことから、気象やそこから生じる自然環境も地域により大きな違いを見せる。この自然環境の違いがその地域に住む人間の生活にも大きく影響しており、生活の違いが生み出した歴史が本市の特徴でもある。

報告する末法遺跡は市東部にあり、荒川によって形成された扇状地の扇頂部末端に位置する。この東部地域は東側に荒川が流れ、西側には黒富士火山によって形成された通称「登美台地」が南北に伸び、台地の裾を荒川の支流貢川が南流する。この荒川と貢川との間にある扇状地には南北に伸びる微高地が東西に其々1筋あり、末法遺跡は東側微高地の末端に位置する。

2. 末法遺跡とその周辺（第2・第3・第13図）

末法遺跡は平成11年（1999）の試掘調査によってその存在が明らかとなり、平成23年度までに6回に亘り本調査が実施されている。

これまでの調査で得られた資料を基に末法遺跡を概観してみる。

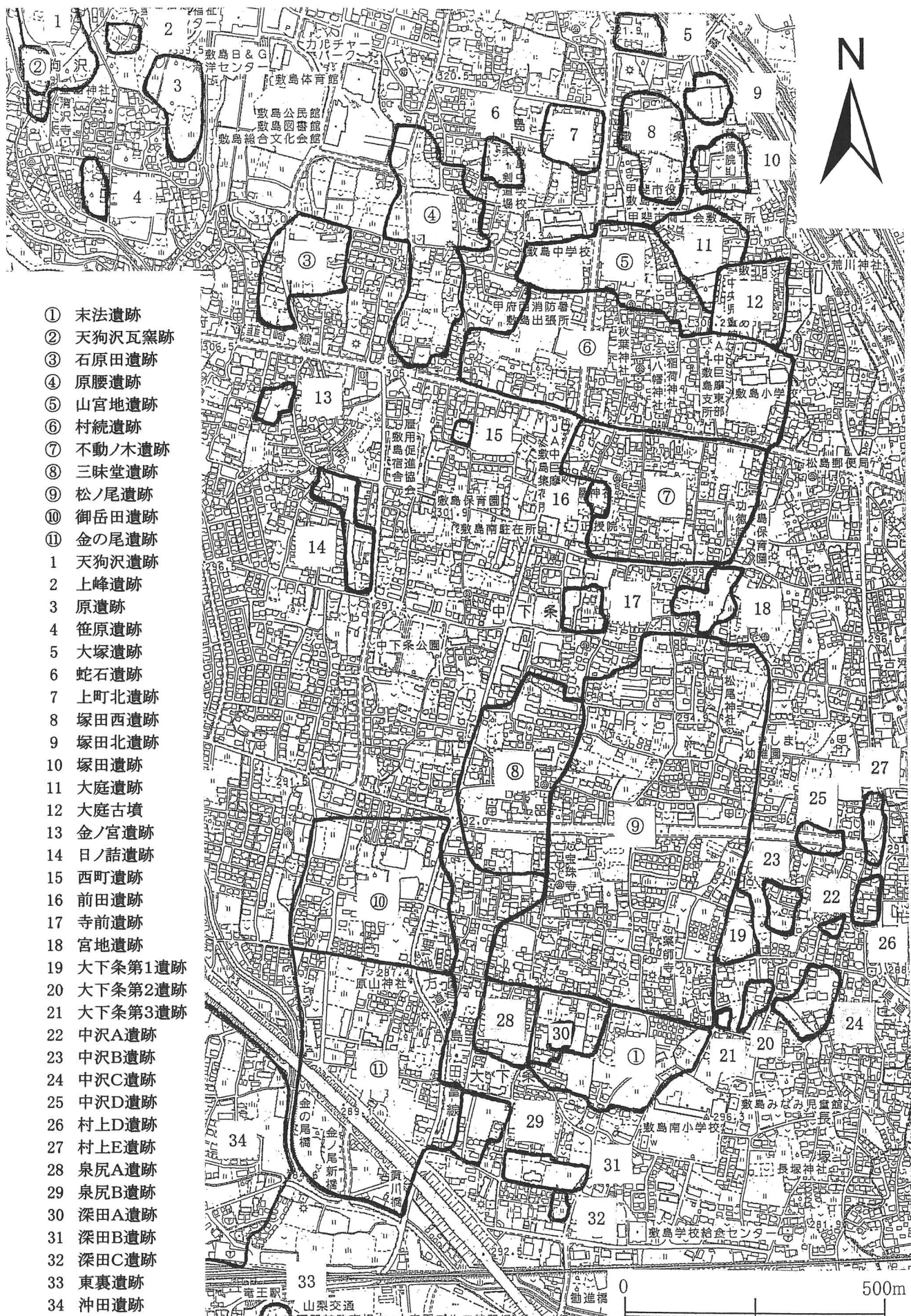
縄文時代の遺構はこれまでのところ発見されていない。遺物については遺構確認面直上層から前期諸磯式期、中期貉沢式期、勝坂式期、曾利式期、後期称名寺式期に亘る遺物が出土しており、特に曾利式期の土器片が豊富に見られる。この他、石鏃、打製石斧、石皿などの石器類も多く出土しており、遺構は未確認であるが調査地点周辺に当該期の遺構が存在することが予測される。

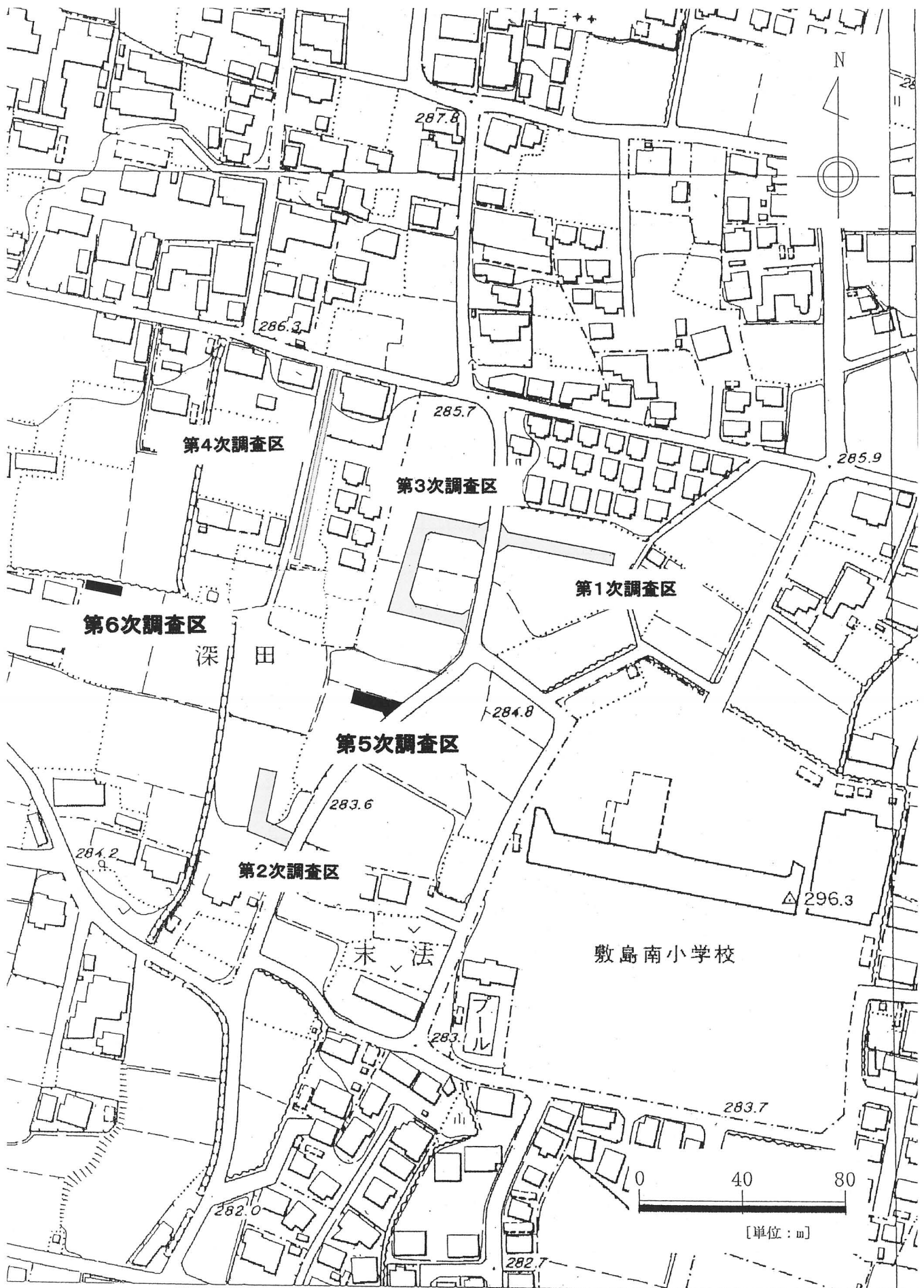
弥生時代の遺構についてもこれまでのところ確認されていない。遺物については2、4次調査において頸部櫛描波状文の甕片が出土しており、さらに2次調査では北陸系の赤彩細頸壺の一部が出土している。いずれも弥生後期に位置付けられるものであり、縄文期同様遺跡内に弥生後期の遺構が存在することが予測される。

古墳時代についてはこれまでの各次調査で豊富な資料が得られており、遺構では住居跡15軒、方形周溝墓1基の他、溝跡、土坑跡が発見されている。年代を見ると山梨県土器編年のⅠ～Ⅵ期に該当するもので、古墳時代前期から中期となる。これまでのところ本遺跡が営まれた中心的年代である。

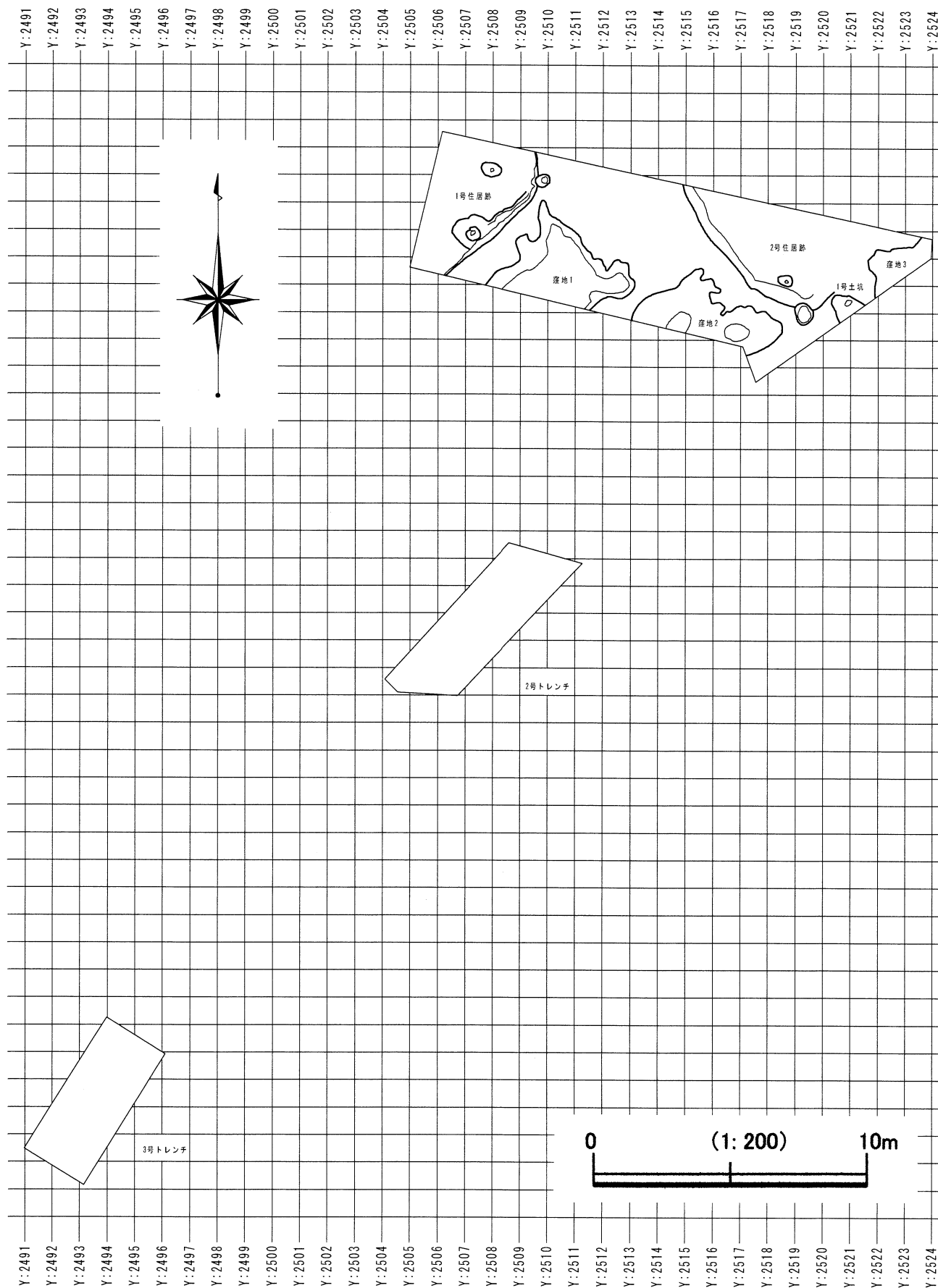
古代から近世にかけての遺構は発見されていないが、遺物については8世紀代の土師器坏や須恵器蓋、15世紀から16世紀代のカワラケ、陶磁器類が出土している。

これまでの末法遺跡周辺の調査結果を見ると、遺跡北方へと微高地が続き、平安時代を中心とする大規模集落





第2図 第5・6次調査区位置図



第3図 第5次調査区全体図

を形成した松ノ尾遺跡や古墳時代後期、平安時代後期の集落遺跡である不動ノ木遺跡などが存在する。また遺跡西側は浅い谷状地形を挟み微高地となり、この微高地末端には金の尾遺跡が存在する。

金の尾遺跡は縄文時代から平安時代に亘る複合遺跡である。これまでに7次の調査が行われ^{※1}縄文時代住居跡9軒、弥生時代住居跡33軒、周溝墓23基、濠跡1条、古墳時代住居跡3軒、周溝墓3基、平安時代住居跡4軒が確認されている。特に弥生時代後期の資料が豊富に出土しており、中部山岳地域と東海地域を結ぶ結節点となる重要遺跡である。

また、末法遺跡西方約1.2kmには通称「赤坂」、「登美」と呼ばれる台地が南北に伸びており、この台地上には毛彫り馬具が副葬された竜王2号墳や県指定史跡となっている中秣塚古墳など赤坂台古墳群と呼ばれる後期群集墳が形成されている。

このように末法遺跡周辺は荒川、貢川によってつくられ肥沃な土地であり、微高地には縄文時代から現代に至るまで連綿と人間の生活が営まれてきたことが分かる。

周辺の遺跡も含め概観すると、弥生時代では本県における当該期の集落形成や土器編年を考える上で重要な地域であり、古墳時代では前期から後期までの全般に亘る遺構が確認され希少な資料を提示している。また、古墳時代後期から平安時代にかけては大規模集落が形成され、布目瓦、円面硯、帯金具、螺髪、小金銅仏、土錘といった特殊遺物が出土している。甲斐市は律令制下の「巨摩郡」に属し、平安末期以降は京都松尾大社の荘園地「志摩荘」の領域となる。このことは遺跡周辺は古代甲斐国巨摩郡の政治、経済、軍事、交通の拠点地域であった事を物語っている。

※1 平成23年度に8次調査、24年度に9次調査を実施予定。

第2章 第5次調査 遺構と遺物

1. 基本層位

遺跡は荒川によって形成された扇状地上の沖積地に立地する。遺跡北方の松ノ尾遺跡では砂粒を多く含む茶褐色土、黒色土（遺物包含層）の堆積が厚く認められるが、本遺跡からは砂粒を多く含む茶褐色土は認められたものの黒色土は確認されなかった。

- | | |
|-------------|---|
| I層＝表土層（耕作土） | 15cm前後の堆積。 |
| II層＝灰黄褐色 | 25cm前後の堆積。しまり、粘性ともに強く近世の田圃床土か。 |
| III層＝暗褐色 | 10cm前後の堆積。しまり強、粘性弱 砂粒をやや多く含む土器片を少量含む。 |
| IV層＝極暗褐色 | 25cm前後の堆積。しまり強、粘性中 微砂粒を含み遺物包含層遺構確認面直上層。 |

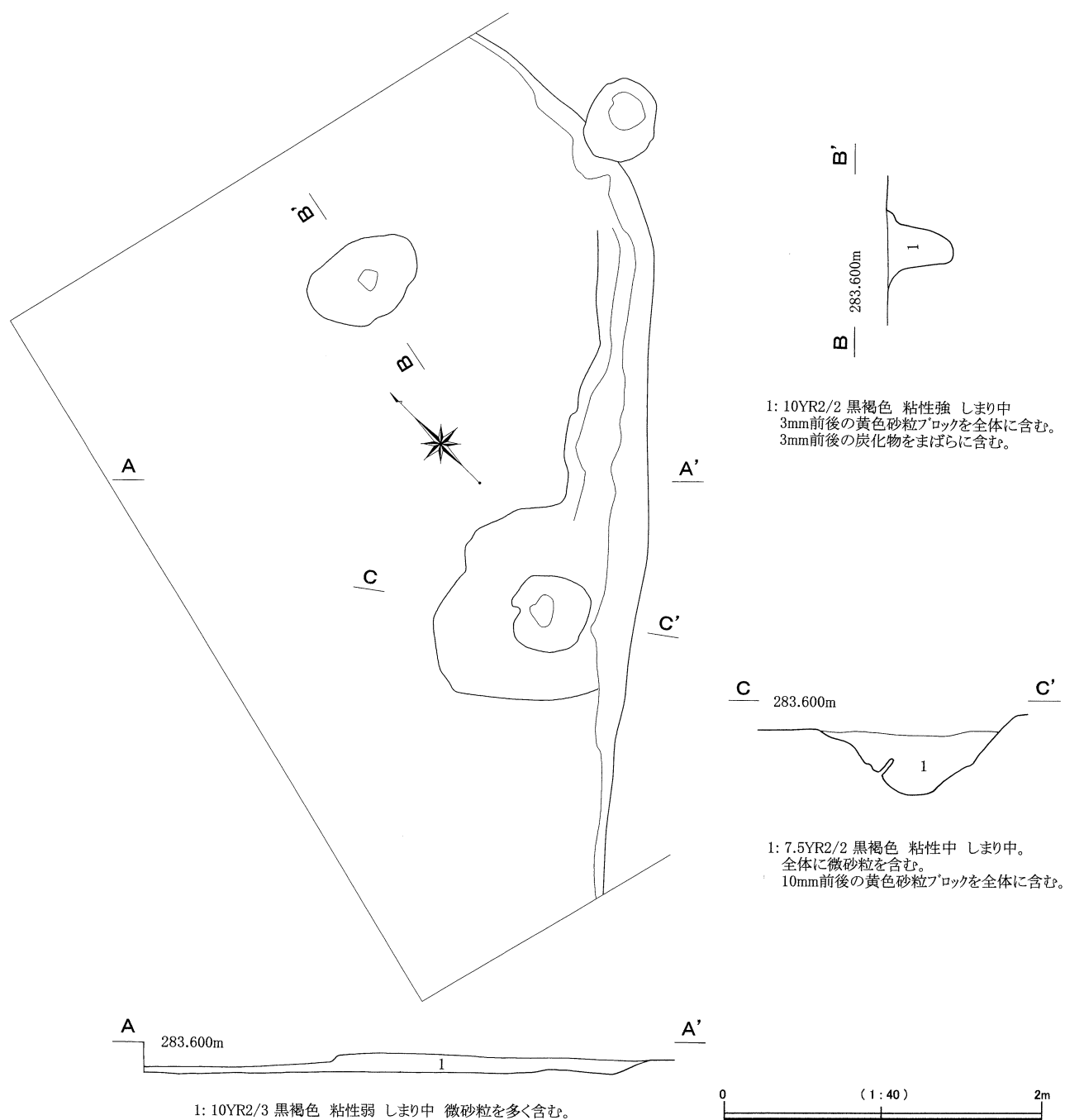
2. 住居跡

1号住居跡（第4・5図、第1表、図版2・5）

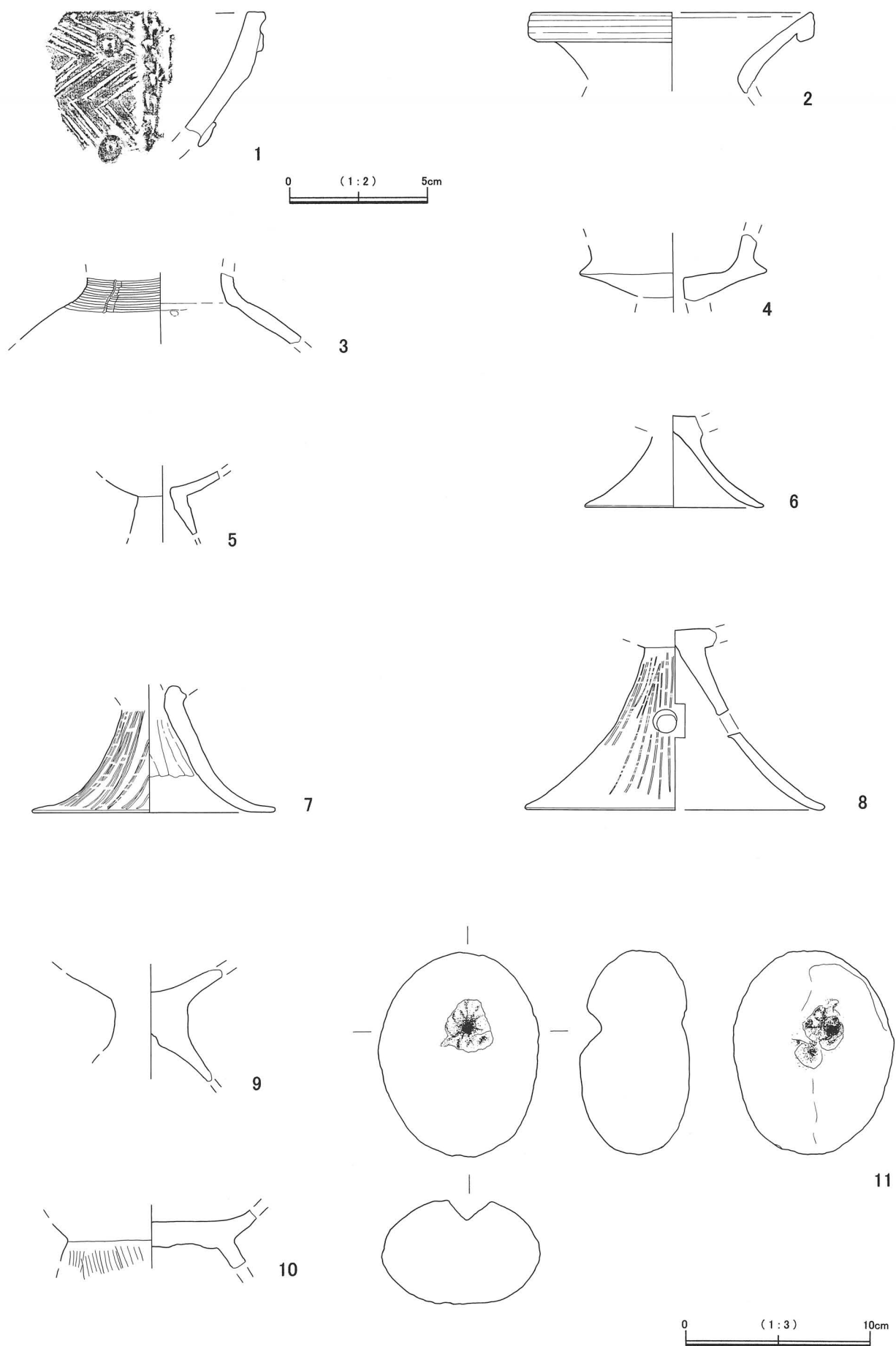
本跡は調査区西端に位置し、遺構の大部分が調査区外となる。規模は確認できる範囲で、東西3.6m、南北6mを測る。壁は南壁から東壁コーナーにかけて確認でき、壁高は10cmで、やや角度をもって立ち上がる。平面形は南壁のライン及び南東コーナーから推測し隅丸方形と考えられる。また、南壁付近にある上場掘り込み直径

1 m、深さ40cmのピットから南壁に沿って幅約30cm、深さ約20cmの溝が北東コーナー付近まで続く。このピットは深さ約20cmで直径36cmに規模が小さくなり、中場ラインをつくりそこから垂直に掘られていることから柱穴の可能性が考えられる。この他に南東コーナー付近に上場掘り込み直径55cmで上場から若干掘られてから直径30cm、深さ40cmとなるものと、南東コーナー地点の遺構外側に直径50cm、深さ40cmの2ヶ所のピットが確認されている。床は全体に硬化面が広がり、貼り床である。

遺物は多くが覆土下部から出土しており、3世紀末葉から4世紀前半のものであるが第5図1は縄文前期後半の諸磯c 2～3で、貼床直下からの出土である。



第4図 第5次1号住居跡



第5図 第5次1号住居跡出土遺物

第1表 第5次1号住居跡出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H5-1住 貼床直下	縄文土器	深鉢	残4.7	(32.0)		にぶい赤褐 5YR4/5	長石	良好	
2	H5-1住 P1	土師器	壺	残5.5	(15.0)		外面 にぶい褐 7.5YR5/4 内面 にぶい赤褐 2.5YR4/4	長石・雲母	良	口辺部横方向沈線 内面赤色顔料 折り返し二重口縁
3	H5-1住 P9	土師器	甕か壺	残3.8			橙 5YR6/6	白色粒子・石英 金雲母・赤色粒子	良	外面頸部横方向 櫛描糜状文
4	H5-1住 P14	土師器	器台	残3.4			橙 5YR6/6	長石・石英	良好	
5	H5-1住 P3	土師器	器台	残3.4			橙 7.5YR6/6	長石・石英	良好	中心に推定1cmの孔
6	H5-1住 ピット2P1	土師器	高坏	残5.0		13.5	橙 5YR6/8	長石・石英	良好	外面縦方向ミガキが 施された痕跡あり
7	H5-1住 P7	土師器	高坏	残6.3		13.5	橙 5YR6/8	長石	良好	外面縦方向のミガキ
8	H5-1住 P8	土師器	高坏	残9.75		(15.8)	橙 7.5YR6/6	長石・石英	良好	外面縦方向のミガキ脚部3ヶ所に直 径1.3cmの孔を有す
9	H5-1住 P2	土師器	高坏	残6.0			にぶい橙 7.5YR7/4	長石・石英 赤色粒子・砂粒	良好	
10	H5-1住 P10	土師器	台付甕	残3.1			橙 5YR6/6	長石・石英 赤色粒子	良好	外面斜め方向ハケメ
11	H5-1住 S-1床直	石製品	凹石	最大長 11.0	最大幅 8.6	最大厚 6.0				

2号住居跡（第6・7図、第2表、図版2・5）

本跡は調査区北東端に位置し、遺構の大部分が調査区外となる。規模は確認できる範囲で、東西4m、南北6.6mを測る。壁は西壁から南壁コーナーにかけて確認でき、壁高は20cmで、緩やかに立ち上がる。平面形は西壁ライン及び南西コーナーから推測し、方形と考えられる。

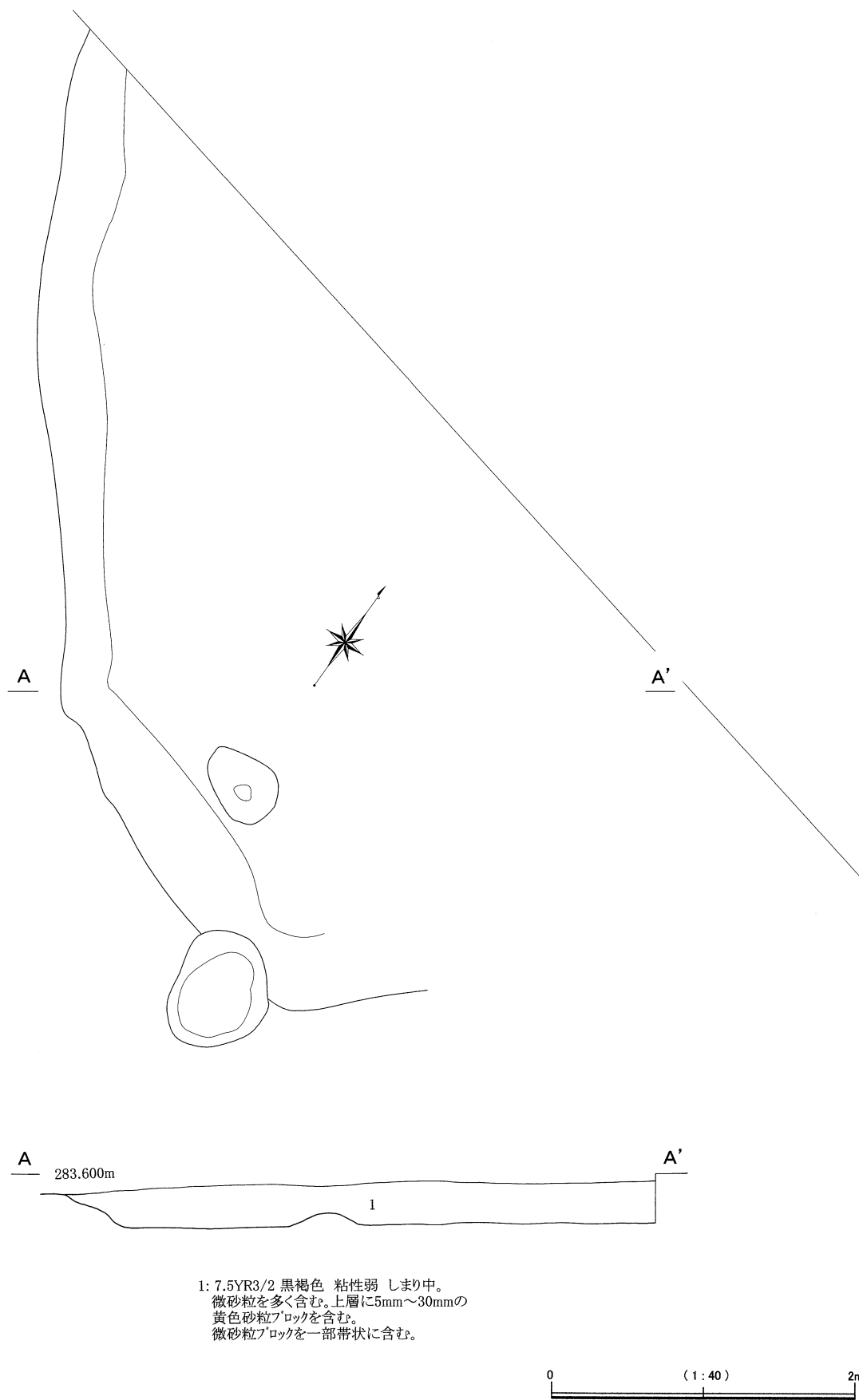
南西コーナーの住居内に直径50cm、同じく南西コーナー上に直径70cmのピットが確認された。

南壁は立ち上がり無く、床は硬化面が小規模範囲で部分的に認められたが、全体にはシルト質の黄色土である。

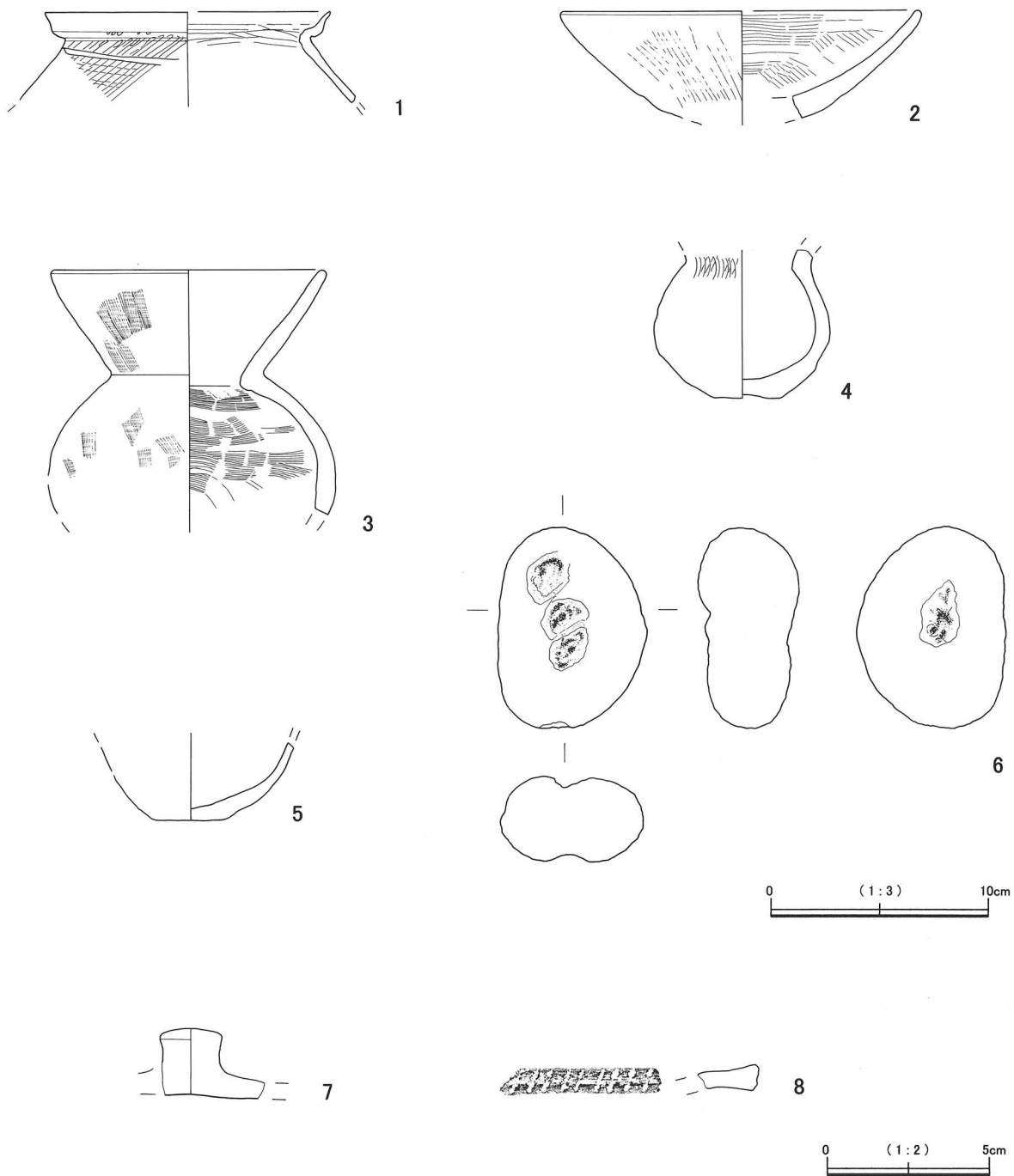
遺物は多くが覆土下部から出土しており4世紀後半から5世紀初頭に位置づけられる

第2表 第5次2号住居跡出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H5-2住 床直掘方	土師器	S字状口縁 台付甕	残4.3	(13.0)		赤褐 5YR4/6	長石・金雲母 赤色粒子・石英	良好	内面口縁部横方向ナデ 外面口縁部横方向ヘラナデ
2	H5-2住 P9	土師器	高坏	残4.9	(16.0)		赤褐 5YR4/6	石英・赤色粒子	良好	内面ハケメ 外面縦方向ハケメ後横ナデ
3	H5-2住 P7,P8	土師器	小型丸底壺	残11.2	12.4		橙 7.5YR6/6	長石・石英	良好	内面横方向ヘラナデ 外面縦方向ハケメ後ナデ
4	H5-2住 P1	土師器	小型壺	残6.8		3.0	明赤褐 5YR5/6	長石・石英	良好	外面頸部縦方向ハケメ
5	H5-2住 P11	土師器	小型壺	残3.45		3.7	にぶい赤褐 2.5YR4/4	長石・石英	良好	
6	H5-2住 S1	石製品	凹石	最大長 9.2	最大幅 6.9	最大厚 3.8				
7	H5-2住 P6	土師器	蓋(つまみ)	残2.1			橙 7.5YR6/6	長石	良	
8	H5-2住 第1層	土師器			(20.0)		にぶい橙 7.5YR7/4	赤色粒子・雲母	良	口唇部刺突文を施す



第6図 第5次2号住居跡



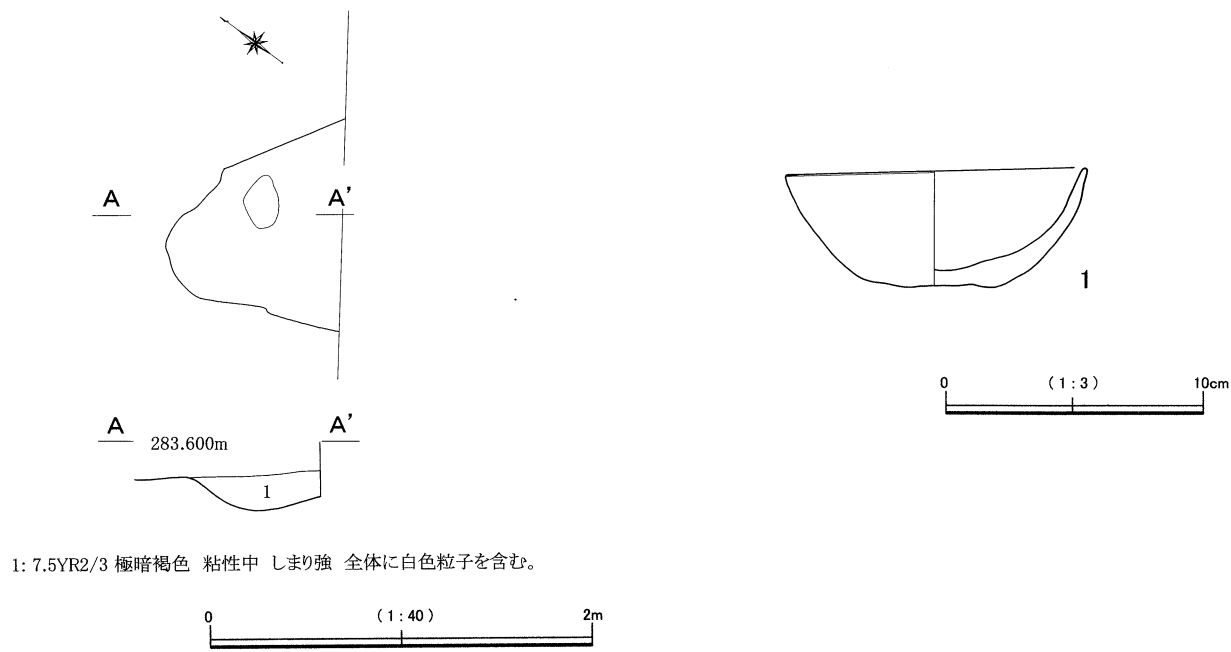
第7図 第5次2号住居跡出土遺物

3. 土坑跡

1号土坑跡（第8図、第3表、図版2・5）

調査区東端で、窪地3の南側に位置する。土坑の東側半分は調査区外となる。平面形は確認できる範囲で円形又は楕円形と推定される。土坑の壁は緩やかで、深さは最深20cmを測る。

遺物は覆土から土師器坏が出土している。



第8図 第5次1号土坑跡・出土遺物

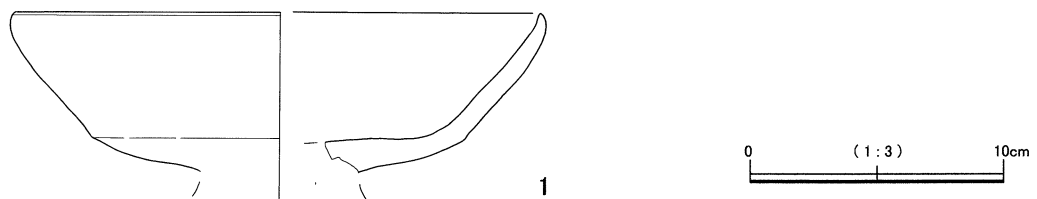
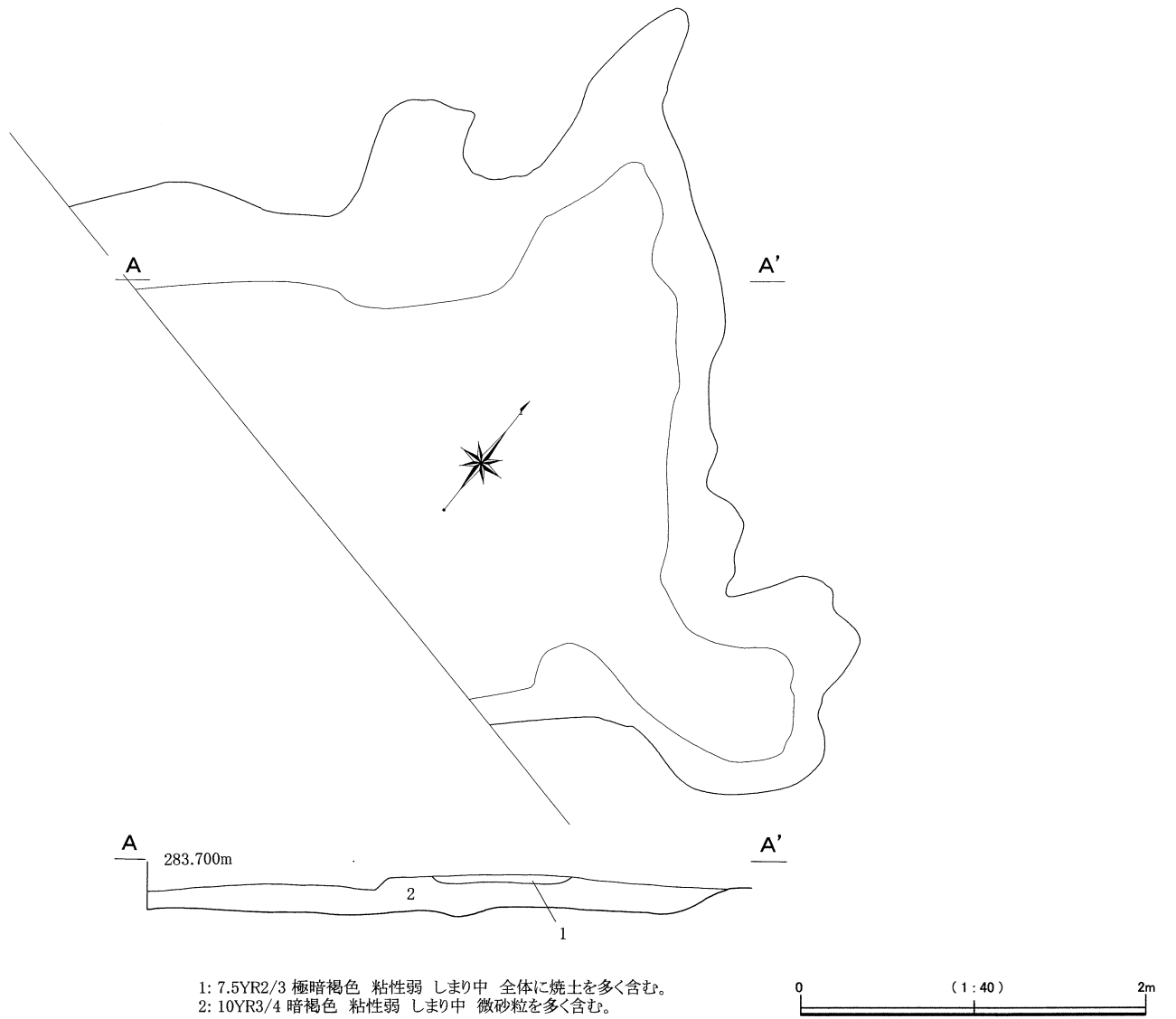
第3表 第5次1号土坑跡出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H5-1土 P1	土師器	坏	4.7	11.8	4.2	明赤褐 2.5YR5/6	長石・石英	良好	内面ナデ整形 外面体部不鮮明な横方向ヘラ削り

4. 窪地

窪地1（第9・10図、第4表、図版2）

1号住居跡南側に位置する。平面形は不整形を呈し西側及び南側ラインは調査区外となる。落ち込みは緩やかで、深さは約20cmを測る。遺物は土師器片があり、高坏身部が出土している。



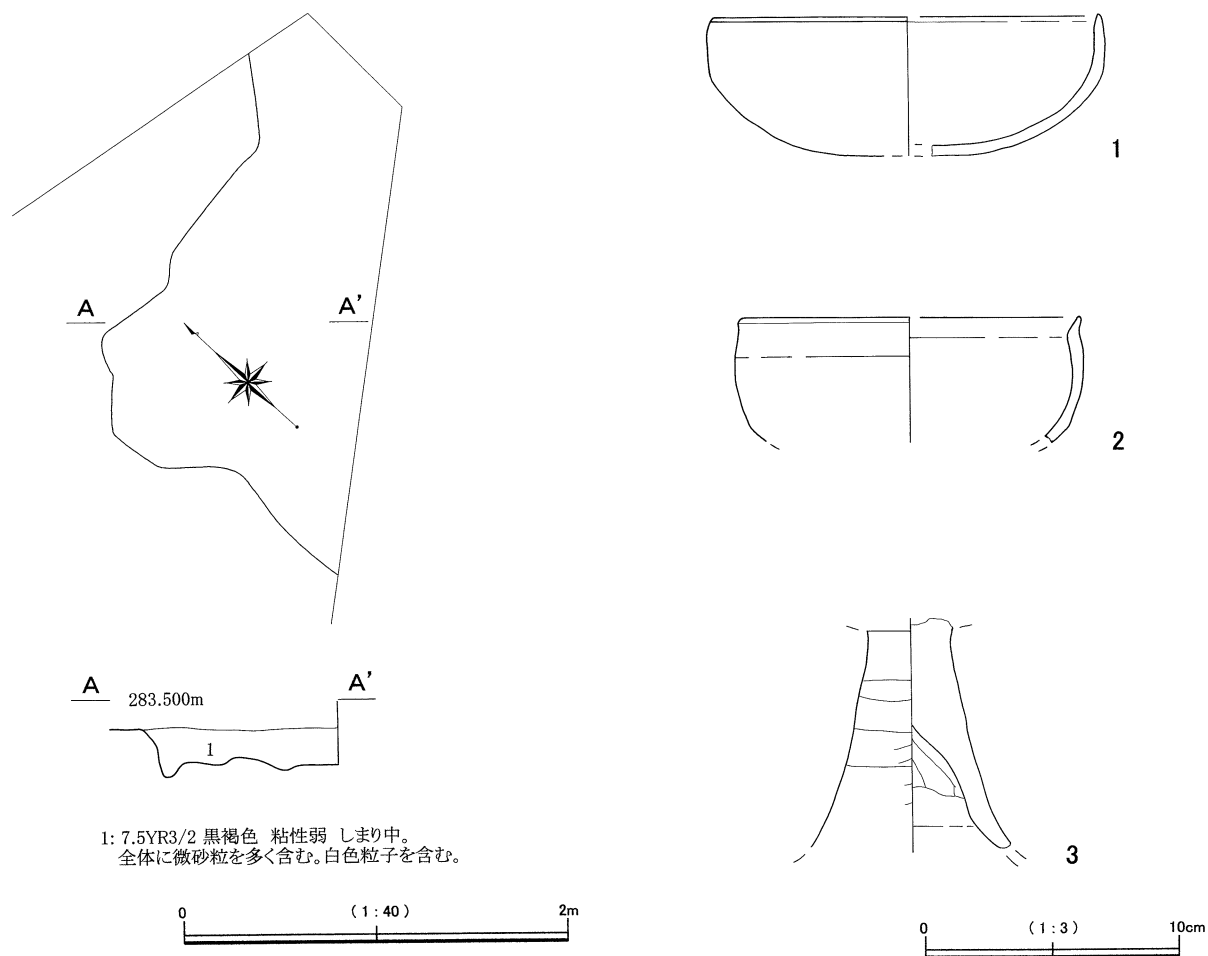
第10図 第5次窪地1 出土遺物

第4表 第5次窪地1 出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H5-クボチ1 一括	土師器	高坏	残6.1	(20.6)		橙 5YR6/6	長石・金雲母	良好	内外面横ナデ

窪地 3（第11図、第 5 表、図版 2・5）

調査区東端の 2 号住居跡東側に位置する。窪地の大部分が調査区外となるため平面形は不明である。比較的角
度を持って落ち込んでおり、深さは約20cmを測る。遺物は土師器環や高坏など落ち込み面積に比べ多く出土し
ている。



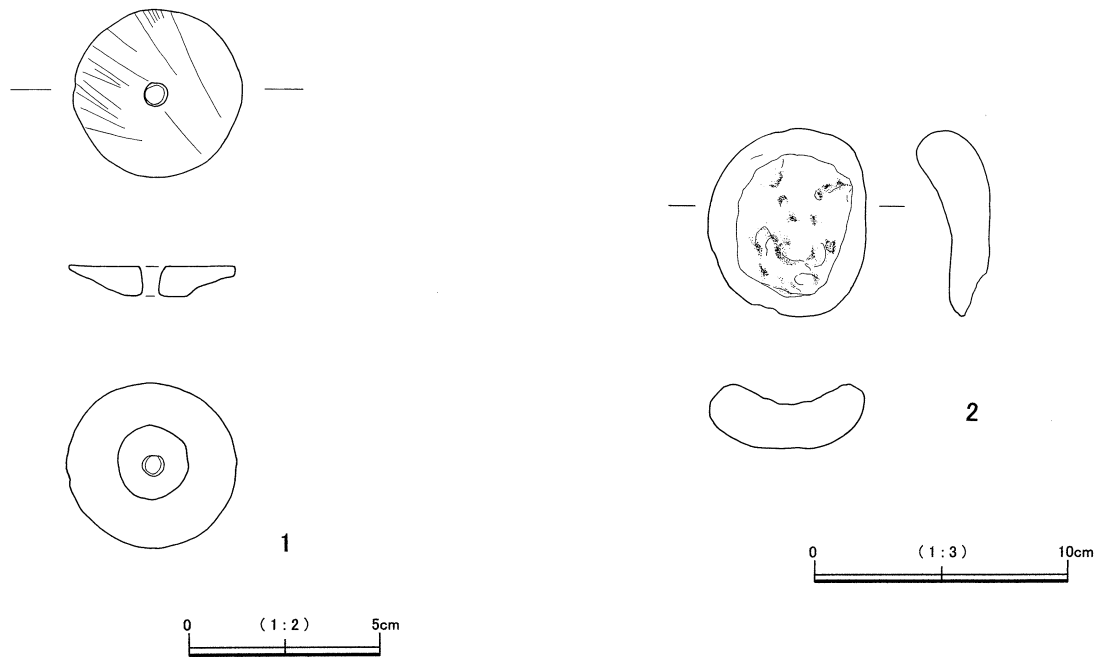
第11図 第 5 次窪地 3・出土遺物

第 5 表 第 5 次窪地 3 出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H5-クボチ3 P2	土師器	坏	5.5	(15.0)	5.0	にぶい橙 7.5YR6/4	長石・赤色粒子	良	内外面放射状暗文
2	H5-クボチ3 第1層	土師器	坏	残5.0	(13.0)		内面にぶい黄褐 10YR5/3 外面灰黄褐 10YR4/2	緻密	良好	内面横方向ナデ 外面縦方向ミガキ
3	H5-クボチ3 P1	土師器	高坏	残9.2			明赤褐 2.5YR5/6	赤色粒子	良	内面ヘラ削り 外面横方向ミガキ 横方向線刻

5. 遺構外遺物（第12図、第6表、図版2・6）

本調査区基本層序第IV層は土師器小片などが多く出土する遺物包含層となっている。図示した遺物は何れもIV層からの出土で、1は第2調査区から出土の石製紡錘車である。2の凹石は2号住居跡南側から出土している。



第12図 第5次遺構外出土遺物

第6表 第5次遺構外出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H5-第2 7層S-1	石製品	紡錘車	最大長 4.4	最大幅 4.4	最大厚 0.8	暗オリーブ灰 5GY3/1			中心に円形孔有り
2	H5-第1 2住南	石製品	凹石	最大長 7.4	最大幅 6.1	最大厚 2.5				

第3章 第6次調査 遺構と遺物

1. 基本層位

本調査区の層位はⅠ層からⅢ層まであり、Ⅲ層直下が遺構確認面となる。6次調査区東方約120mで実施した5次調査区の層位と比較するとほぼ同一層となるが、5次調査区の第Ⅲ層は本調査区では確認されなかった。

Ⅰ層＝表土層（耕作土）	15cm前後の堆積土。
Ⅱ層＝灰黄褐色	25cm前後の堆積土。しまり、粘性ともに強く近世以降の田圃床土か。
Ⅲ層＝極暗茶褐色	25cm前後の堆積土。しまり強、粘性中 遺物包含層 遺構確認面直上層

2. 住居跡

本調査区は極めて小規模であり、且つ遺構の重複関係が激しかったため僅かな壁の残存や炉跡、貼床面の範囲などによって住居跡の規模、平面形などを推定した。また遺物についても出土地点のレベルや床面との位置関係などから遺構との組み合わせを行った。

1号住居跡（第14・15・16図、第7表、図版3・4・6・7）

本跡は調査区西南に僅か2.5mの壁を残すだけであった。壁の立ち上がりから及び硬化面から床面を追った。西壁から1.4m程で3号住居跡と重複関係となる。調査区北側で炉跡を確認した。確認規模は東西1.2m、南北1.3mでその他は調査区外となる。

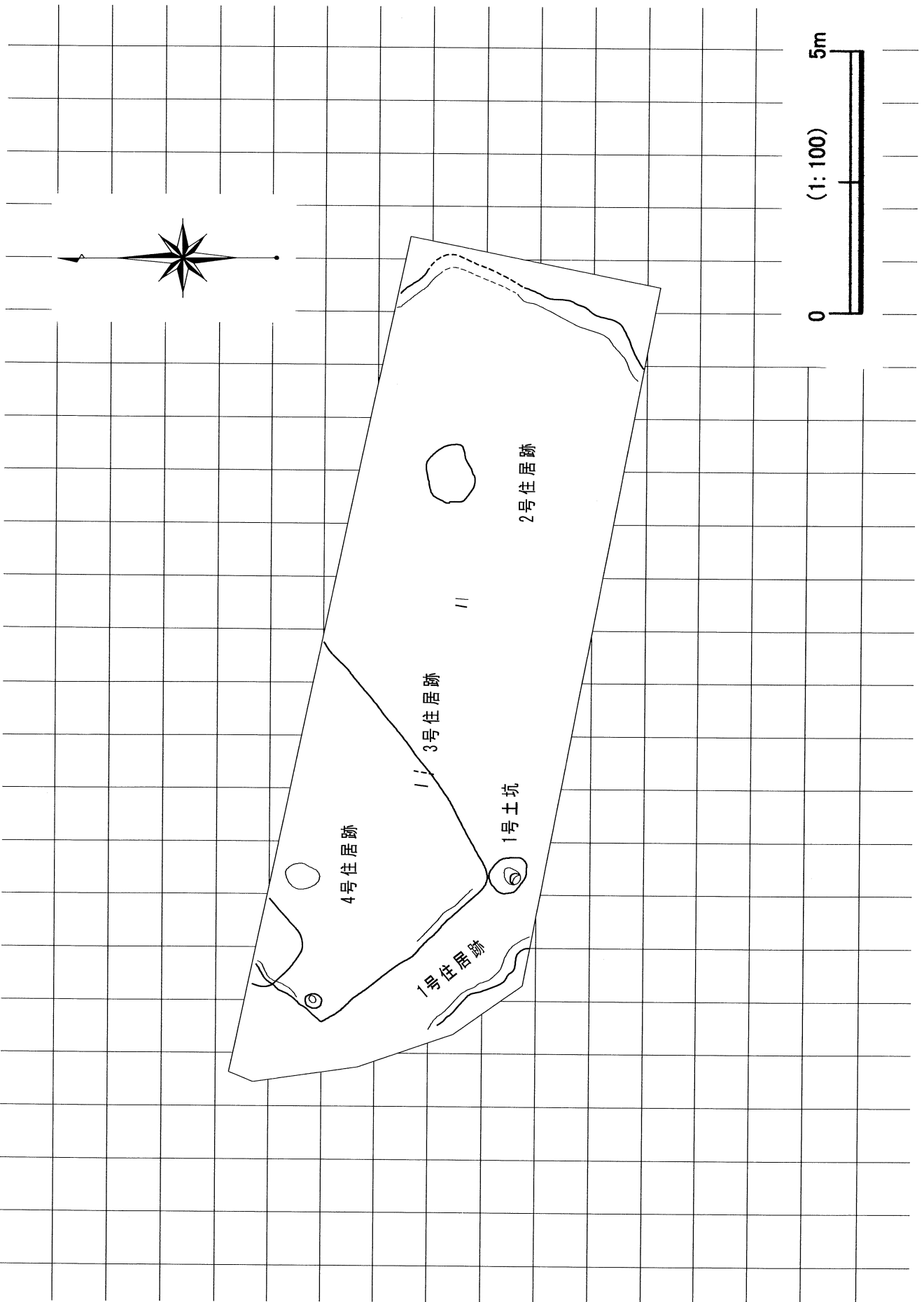
3号住居跡（第14・17・18図、第8表、図版3・4・7）

本跡は調査区中央に位置し、壁は西壁が20cm確認されたのみであった。壁高は28cmで、比較的角度をもって立ち上がっている。土層断面では1号住居跡を切り、2号住居跡に切られていることが観察された。

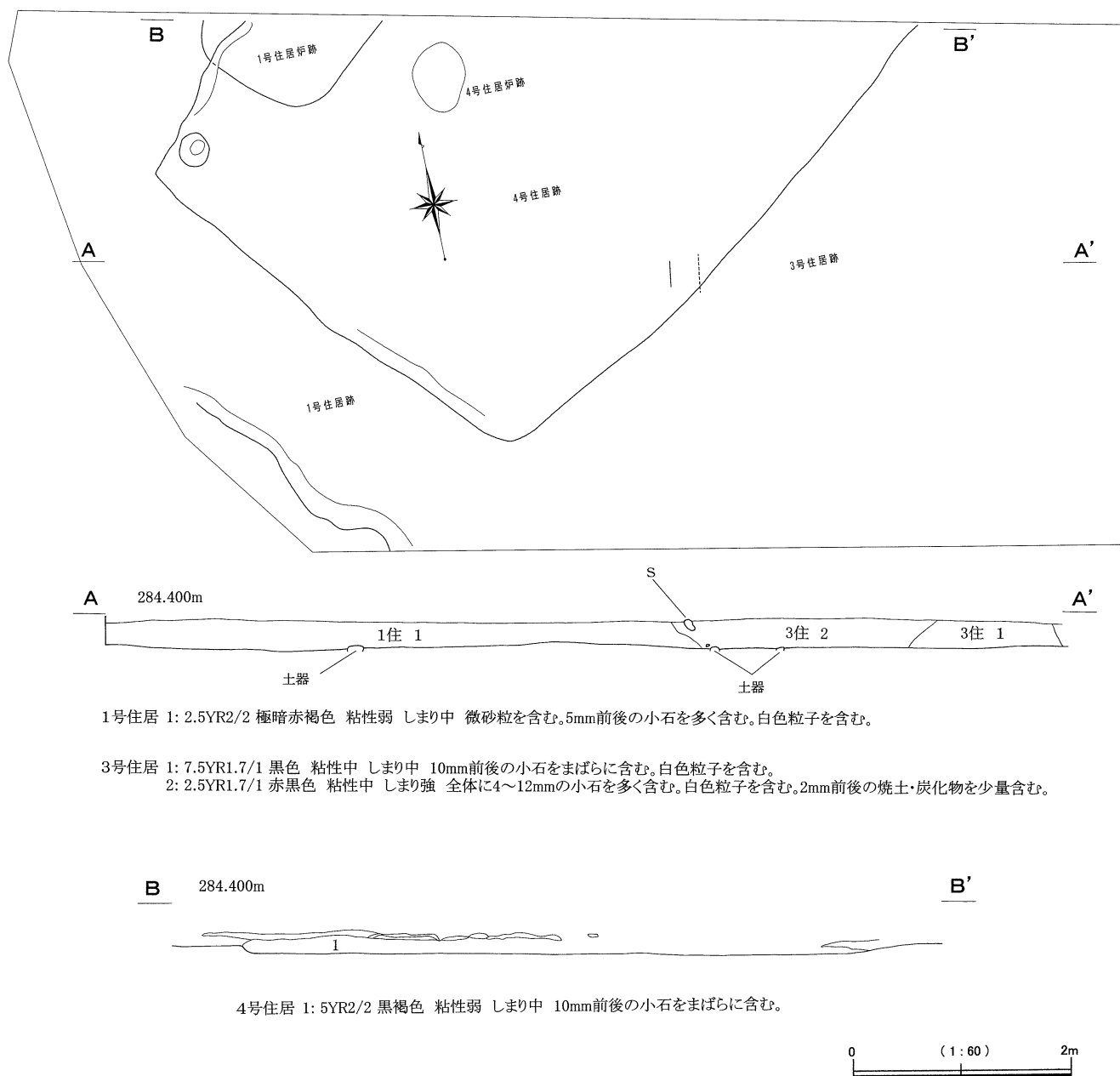
4号住居跡（第14・19図、第9表、図版3・7）

今次調査において、平面形の残存が最も良好に確認された遺構である。西壁4.2m、南壁5.3mを測り、北壁の一部及び東壁は調査区外となる。壁高の残高は8cmで住居北寄りに直径約50cmの円形を呈する炉跡が確認された。

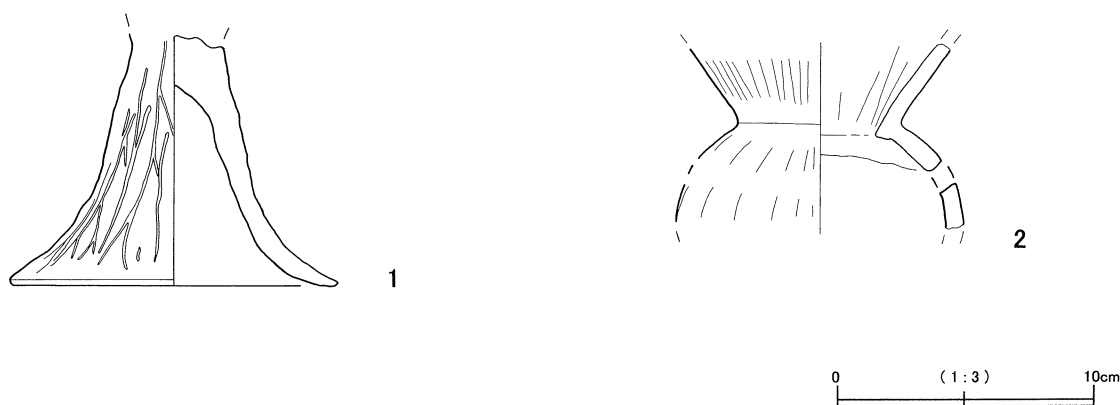
出土遺物の年代や1号住居跡床面及び炉跡の下層から本住居跡の床面を確認したことなどから1、3号住居跡より先行して本跡が構築されたと考えられる。



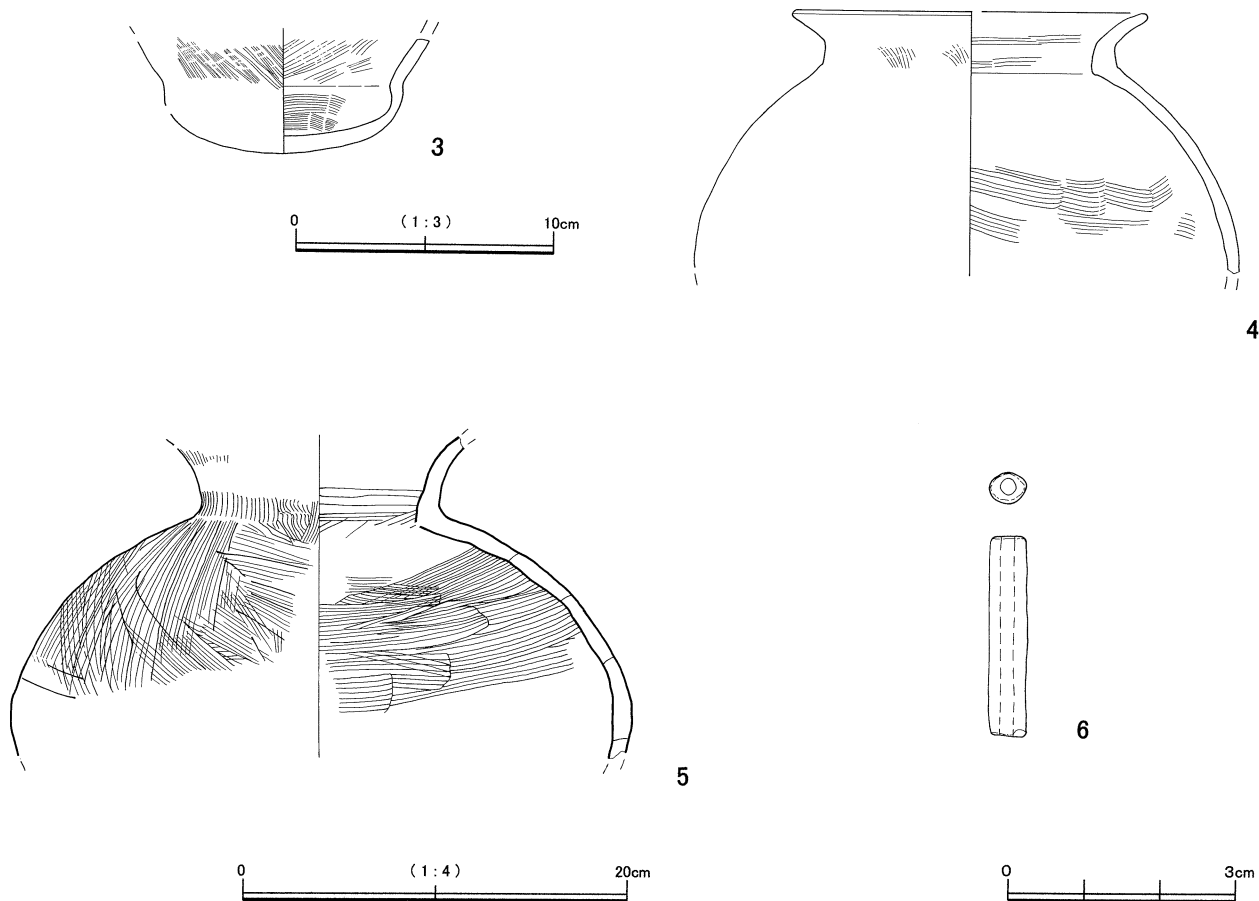
第13図 第6次調査区全体図



第14図 第6次1・3・4号住居跡



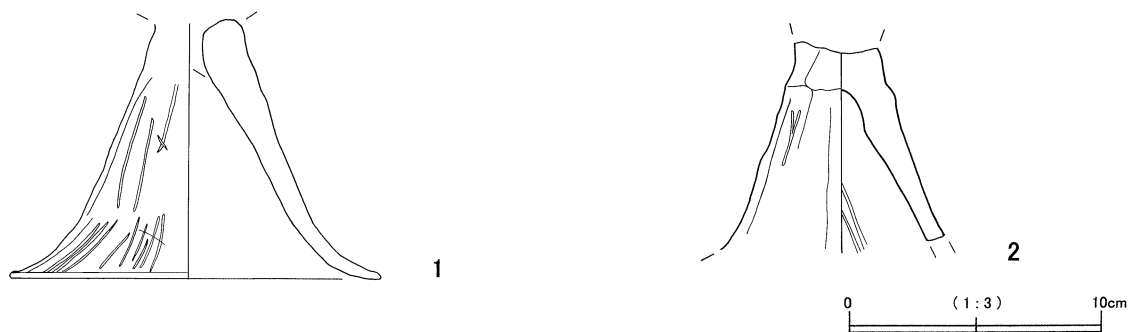
第15図 第6次1号住居跡出土遺物



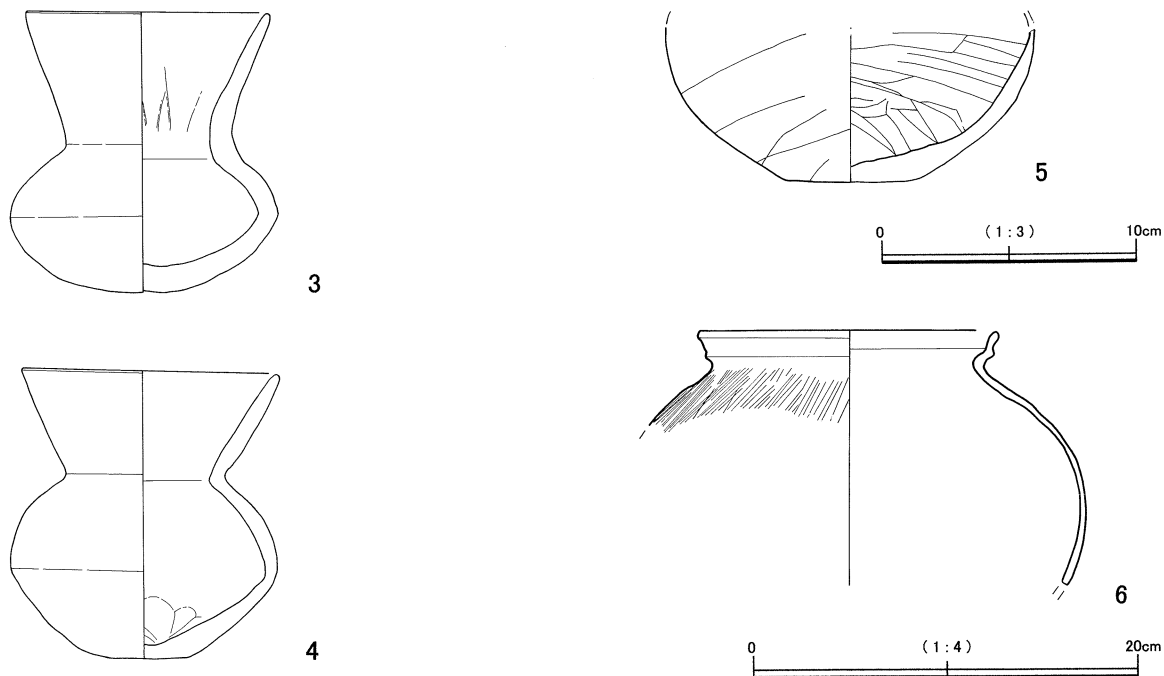
第16図 第6次1号住居跡出土遺物

第7表 第6次1号住居跡出土遺物観察表

番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H6-1住P15	土師器	高杯	残9.6		12.6	橙 2.5YR6/8	赤色粒子・金雲母・ 長石	良好	内外面脚部横ナデ外面縦方向ミガキ
2	H6-1住P11 H6-1住P12	土師器	甗	残7.2			にぶい橙 7.5YR7/4	赤色粒子	良	
3	H6-1住P7	土師器	碗	残4.5		2.0	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英	良好	内面底部ハケメ体部斜め方向ミガキ 外面体部斜め方向ミガキ
4	H6-1住P17	土師器	壺	残13.7	18.3		橙 7.5YR6/6	長石・石英・小石	良好	内面体部横方向ハケメ
5	H6-1住P11	土師器	甕	残17.1			にぶい黄橙 10YR7/3	長石・赤色粒子	良	内面体部横方向ハケメ 外面全体にハケメ
6			管玉	最大長 2.65	最大幅 0.5					ほぼ完形



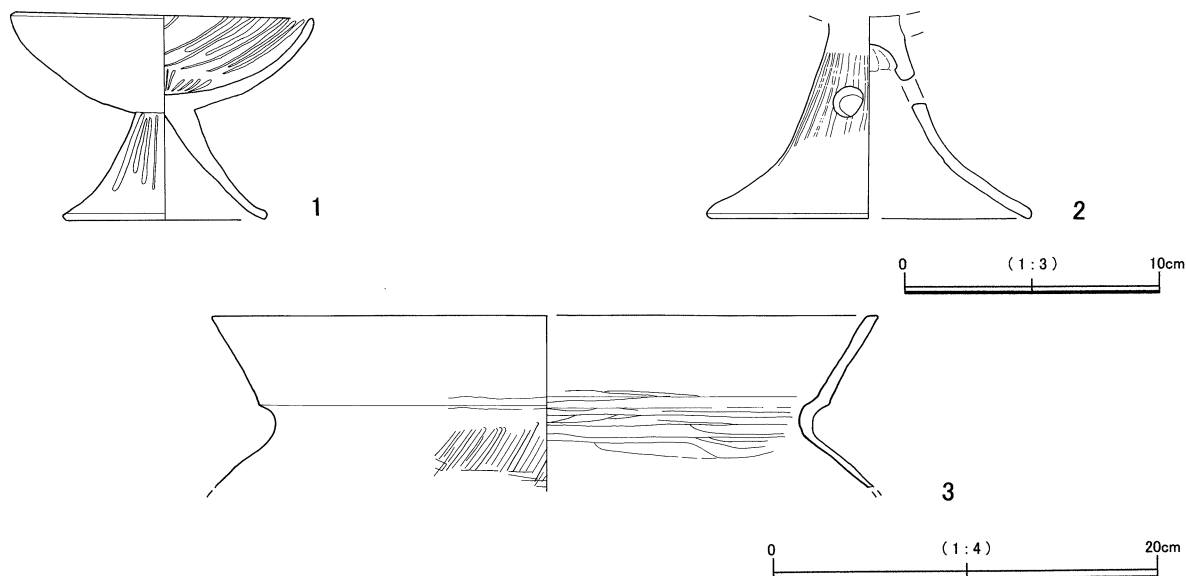
第17図 第6次3号住居跡出土遺物



第18図 第6次3号住居跡出土遺物

第8表 第6次3号住居跡出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	器形の特徴
1	H6-3住P2	土師器	高坏	残10.1		14.6	明赤褐 5YR5/6	金雲母・赤色粒子	良好	内外面脚部横ナデ 外面縦方向ミガキ
2	H6-3住P2	土師器	高坏	残8.4			明赤褐 5YR5/6	赤色粒子・長石・ 金雲母	良好	外面縦方向ミガキ
3	H6-3住P7	土師器	埴	11.2	9.4	2.8	にぶい黄橙 10YR7/4	キメ粗い・長石・ 石英	良好	内外面底部朱の痕跡
4	H6-3住P7	土師器	小型丸底壺	11.4	9.9	3.8	橙 5YR6/6	長石・小石・赤色 粒子	良好	内面底部ヘラ削り
5	H6-3住P5	土師器	小型丸底壺	残6.1		3.0	橙 5YR6/8	長石・赤色粒子	良	内面斜め方向ハケメ 外面縦方向ミガキ横方向ハケメ
6	H6-3住P6	土師器	S字状口縁 台付甕	残13.5	15.2		橙 7.5YR6/6	長石・金雲母・赤 色粒子	良好	内外面口辺部横ナデ 外面体部斜め方向ハケメ



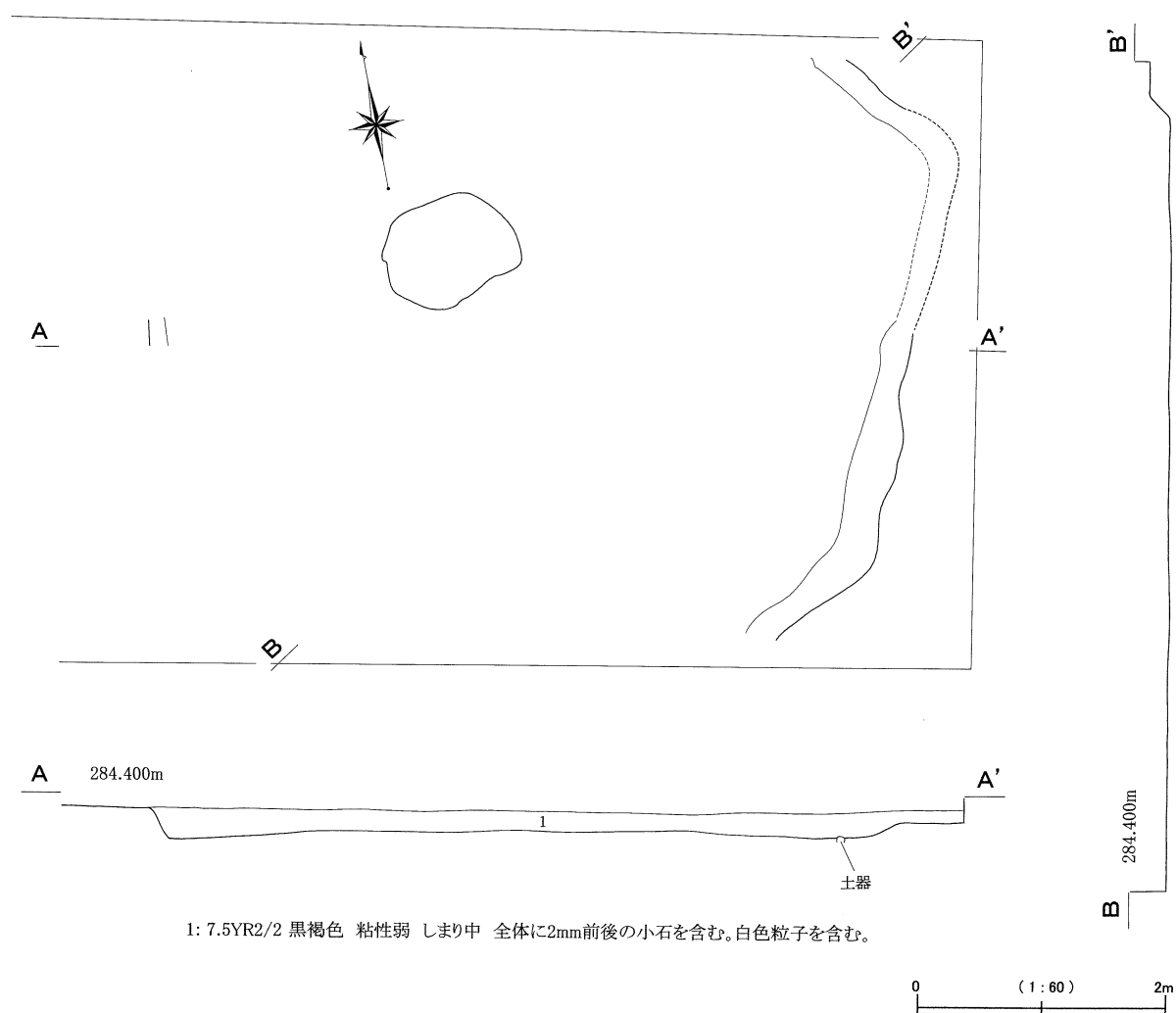
第19図 第6次4号住居跡出土遺物

第9表 第6次4号住居跡出土遺物観察表

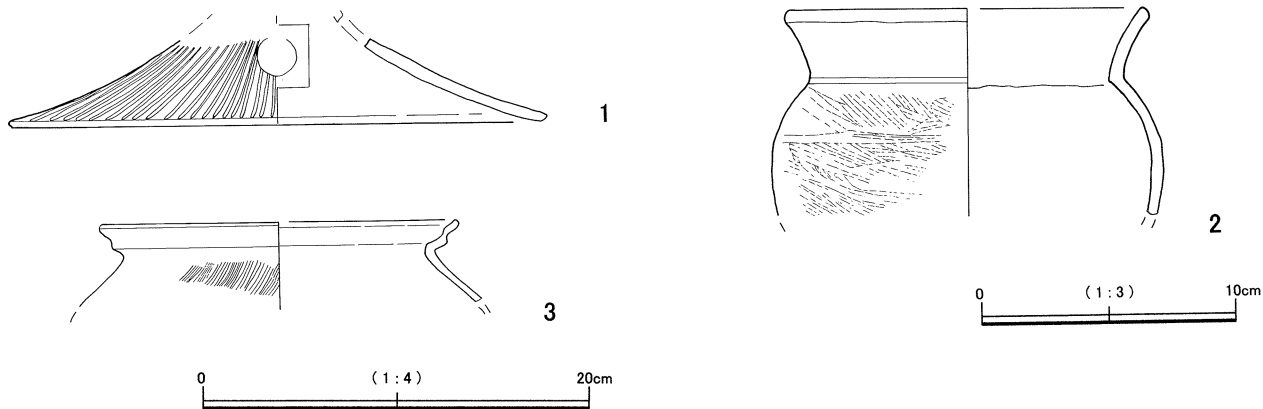
番号	注記番号	器 種	器 形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	H6-4住P1	土師器	高 環	8.3	11.6	8.0	橙 5YR6/6	金雲母・長石・赤 色粒子	良好	外面口辺部横ナデ脚部外面縦方向ミ ガキ身部内面口辺部から体部上半斜 め方向ミガキ体部下半から中心部は 放射状ミガキ
2	H6-4住P6	土師器	高 環	残8.2		(12.4)	明赤褐 5YR5/6	長石・金雲母	良好	外面縦方向ミガキ 3つの孔有り
3	H6-4住P9	土師器	単純口縁 台付甕	残9.1	(34.8)		橙 5YR6/6	長石・金雲母	良	内面頸部横方向ヘラナデ 外面縦方向ハケメ

2号住居跡（第20・21図、第10表、図版3・4）

本跡は調査区東端に位置する。壁は僅かに東壁が2.8mと北壁及び西壁の一部が確認された。北壁の大部分及び南壁は調査区外となる。炉跡は住居跡やや西よりに在り、規模は東西1.1m、南北0.8mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、高さは東側で12cm、西側22cmで、住居平面形は方形と推定される。遺物は年代幅があり4世紀中頃から5世紀中頃のものが出土しているが土層断面では3号住居跡を切っていることが観察できた。



第20図 第6次2号住居跡



第21図 第6次2号住居跡出土遺物

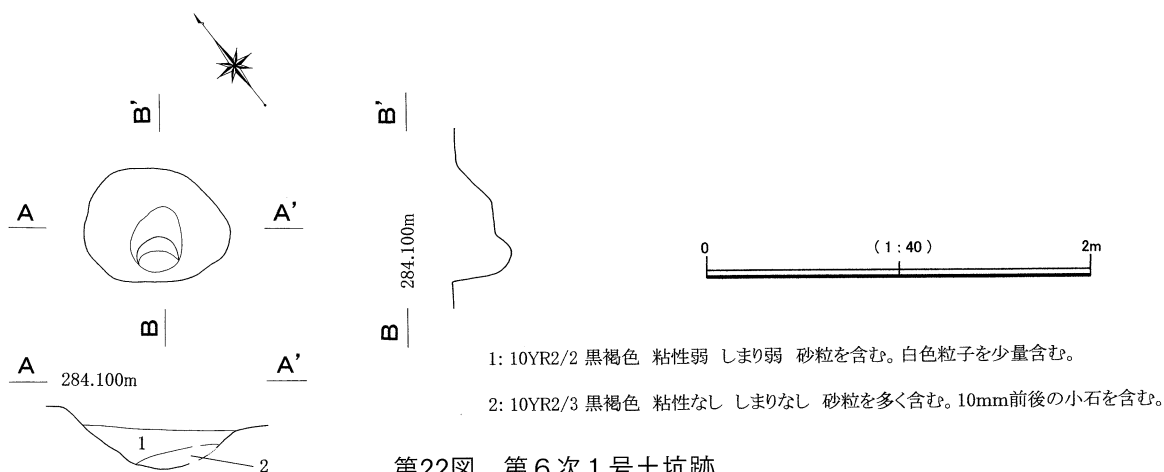
第10表 第6次2号住居跡出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	器形の特徴
1	H6-2住P5	土師器	高坏か器台	残3.0		20.8	にぶい橙 7.5YR6/4	赤色粒子	良	外面放射状ミガキ、脚部に4つの小孔
2	H6-2住P3	土師器	小型壺	残8.2	(13.6)		にぶい褐 7.5YR5/4	長石・赤色粒子・ 雲母	良	内外面口辺部横ナデ外面体部斜め方向ハケメ
3	H6-2住P1	土師器	S字状口縁 台坏甕	残4.4	(18.4)		明赤褐 5YR5/8	長石・金雲母	良好	外面斜め方向ハケメ

3. 土坑跡 (第22図)

1号土坑跡 (第22図)

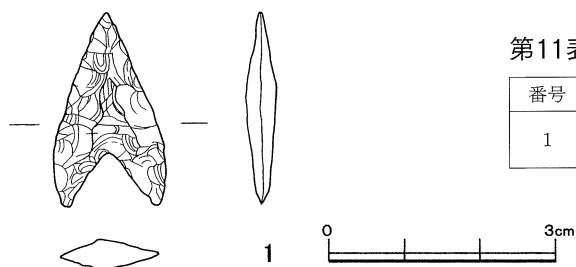
4号住居跡南西コーナーの外に位置し、上場直径60cm、中場直径30cm、深さ30cmを測る。平面形は円形を呈す。土坑中場の直径値や形状、位置関係から4号住居跡或は1号住居跡に伴う土坑、柱穴の可能性も考えられる。



第22図 第6次1号土坑跡

4. 遺構外遺物 (第23図、第11表、図版7)

2号住居跡西壁の外側で同住居跡床面より約10cm低い位置から出土している。



第11表 第6次遺構外出土遺物観察表

番号	器種	器形	計測値 (cm)			石材
1	石鏃	矢じり	最大長 2.6	最大幅 1.5	最大厚 0.35	黒曜石

第23図 第6次遺構外遺物

第4章 ま と め

末法遺跡は荒川右岸の扇状地に位置する。

第1章にも記したとおり遺跡のある市東部地域は荒川扇状地上に位置し、この扇状地には肉眼で僅かに看取できる微高地が南北に2筋認められる。この内東側微高地の南端に営まれた古代集落が末法遺跡で、包蔵地範囲は南北約200m、東西約350mあり、5、6次調査地点は包蔵地のやや東側から中央付近となる。地形は南傾斜で、西側は微高地が続き、東側は一段低くなり低地となる。このことから5次調査区は東側微高地の東縁に位置し、6次調査区は微高地中央と考えられる。

【5次調査】

5次調査地点では2軒の住居跡と1基の土坑が確認された。

1号住居跡から出土した遺物は、床面直下から出土の諸磯c2～3期に該当する縄文土器片の他は3世紀末から4世紀初頭の範囲に位置付けられる。

第5図2は折り返し口縁壺で東海西部のパレス壺に類似するものであり、山梨県弥生土器編年試案の6B相の対比が考えられる。この6B相段階ではすでに山梨県内において類似土器の在地化の傾向が見られるため、6B相土器群が本県における古式土師器の成立段階あるいは成立に大きく関与していると考えられている。また同図3は弥生時代の影響を残し、頸部に簾状文を施す壺である。同図10は直径が10cmを超す大型の台付甕の台部であり、登呂式I期に類似を求めることができる。同図6、7の脚部は本県古墳時代土器編年（以後編年という）のI期に属するものである。

2号住居跡出土遺物を概観すると床面直下の掘り方部分から出土した第7図1のS字状口縁台付甕は編年のI期に該当する3世紀末から4世紀初頭に位置づけられるが、他の高坏や小型壺、小型丸底壺は編年のIII期にあたる4世紀後半から5世紀前半に納まる。S字甕の出土状況などを考慮すると本住居跡の年代は古墳時代中期に位置づけられよう。

土坑は覆土から出土した土師器坏の年代から5世紀第2四半期と考えられる。

本調査区内からは深さ40cmほどの不整形な窪地が3箇所確認されている。この内窪地1からは5世紀中頃の土師器高坏が出土し、また窪地3からも5世紀第2、第3四半期の土師器坏、高坏が出土している。

今次調査の原因となった開発区域の北側では遺構が確認されているが、南側については遺構が発見されなかった。開発区域東側には市道が南北に通っており、遺構が確認された地点と市道との段差は認められなかったが、南側では開発区域が高くなり1mほどの高低差がつく。南側に入れた第3トレンチの土層断面では水田床土の造成跡が観察されたことから開発区域南東端はもともと浅い谷状地形への落ち込みの始まりであったものを造成し、耕作地として整備した可能性が高いことが分かった。なお、第12図1の石製紡錘車は第2トレンチの7層から出土している。この7層は粘性があり、微砂粒を含む極暗褐色土で構成され、土師器片が比較的多く含有されていることから流れ込みによる遺物包含層とした。この場合の遺物は調査区北側に展開される末法遺跡及び松ノ尾遺跡からの流れ込みが考えられよう。

5次調査は面積が僅かであり遺跡の全容を把握するまでには至っていない。しかし、過去1次から4次までの調査では住居跡17軒が調査され、その内15軒が古墳時代初頭から中期に位置づけられるものである。5次調査の成果はこれまでの成果を補充するものであり、荒川扇状地東側微高地末端の歴史環境に新たな資料を提示することとなった。

【6次調査】

6次調査場所は5次調査地点から西へ約120mの地点である。末法遺跡のほぼ中央と考えられ、東側微高地の尾根部分に位置する。

6次調査では調査区が96㎡と狭い上に遺構の重複関係が激しかったため極僅かな壁や貼り床の残存から遺構範囲を推定した。

1号住居跡は炉跡及び西壁が僅か2.5m確認されたのみであった。このため西壁から床面を推定した。出土遺物は編年Ⅲ、Ⅳ期に納まるものであり、5世紀初頭とした。

2号住居跡は炉跡、南壁及び東壁の一部を確認した。出土遺物は概ね編年Ⅱ、Ⅲ期に該当し、4世紀中頃から後半とした。

3号住居跡は1号及び4号住居跡内に極僅かに壁の一部が残り、この壁と2号住居西壁との間に一部硬化した床面が観察された。このような状況であったため出土遺物も推定として取り上げた。

遺物の年代は編年Ⅲ、Ⅳ期に該当し住居年代は5世紀前半に位置づけた。

4号住居跡からは単純口縁台付甕や有孔高坏脚、小型の高坏などが出土している。年代は4世紀中頃から5世紀初頭に該当するが、1号住居跡床面及び炉跡下層から4号住居跡の床面が確認されていることから本住居跡の年代を4世紀中頃から後半とした。

6次調査地点は調査面積に比べ遺構密度が高く、確認された住居跡全てが重複関係にある状況であった。これは調査地点が微高地の尾根上に位置することが大きく影響しているものと考えられよう。調査地の西約120m地点及び南西約200m地点で行った試掘調査では砂礫層と沈殿層が確認され、遺構は発見されず、また東へ約120m地点では1mの落差が肉眼で看取できる。この落差の低地部分は遺跡東方を流れる荒川の旧河道である可能性が高いことなどから、微高地周辺の低地は湿地となっていた可能性が高い。水田耕作など当時の農耕生活の環境を考えれば、微高地末端の尾根部分は最も居住空間に適していた地であると言えよう。

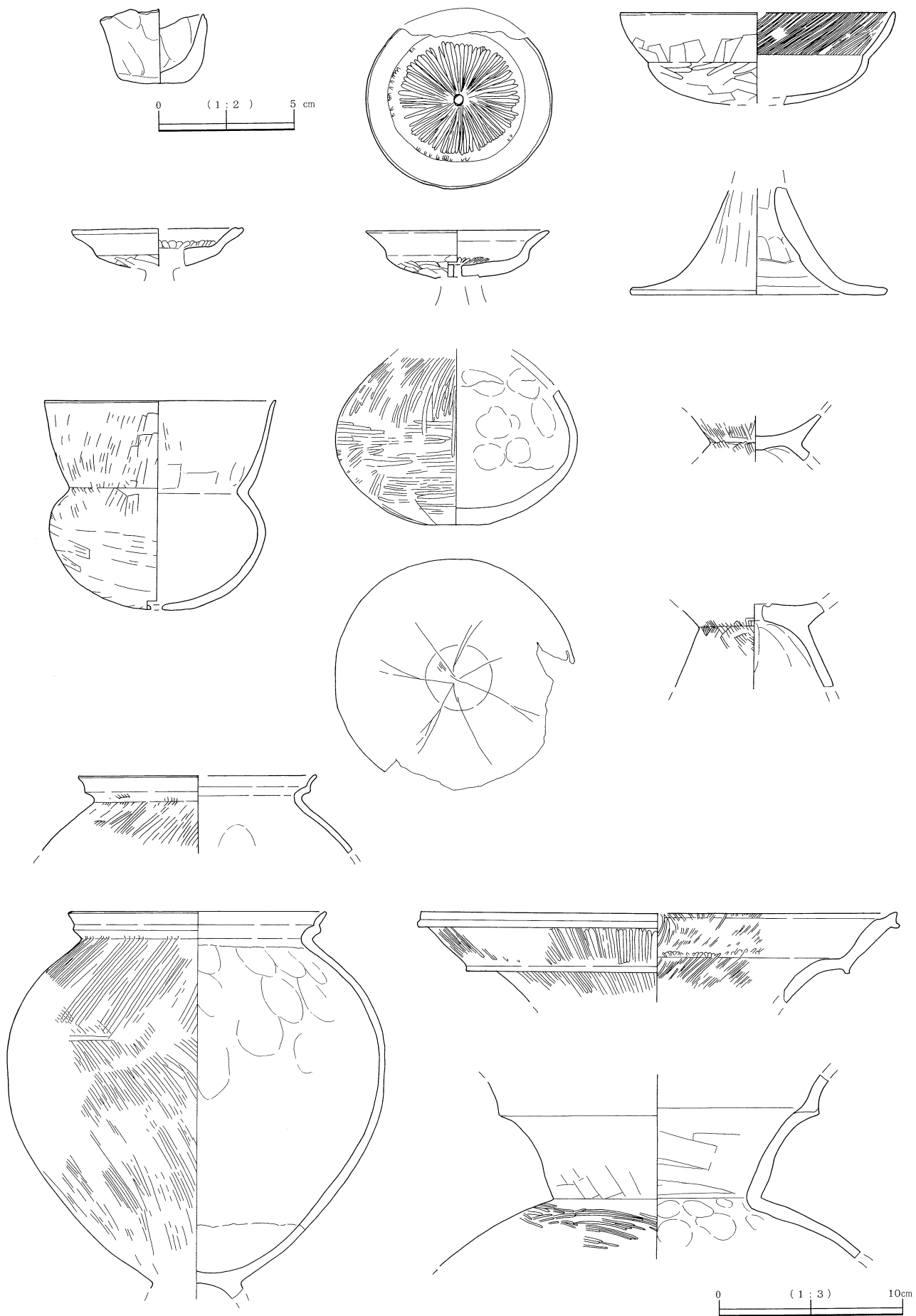
5次、6次調査では合計6軒の住居跡が調査された。この住居跡の年代は次の通りである。

4世紀初頭	5次1号住居跡
4世紀中～4世紀末	6次4号住居跡
4世紀末～5世紀初頭	5次2号住居跡
5世紀初頭～5世紀前半	6次1号住居跡・3号住居跡
5世紀中頃	6次2号住居跡

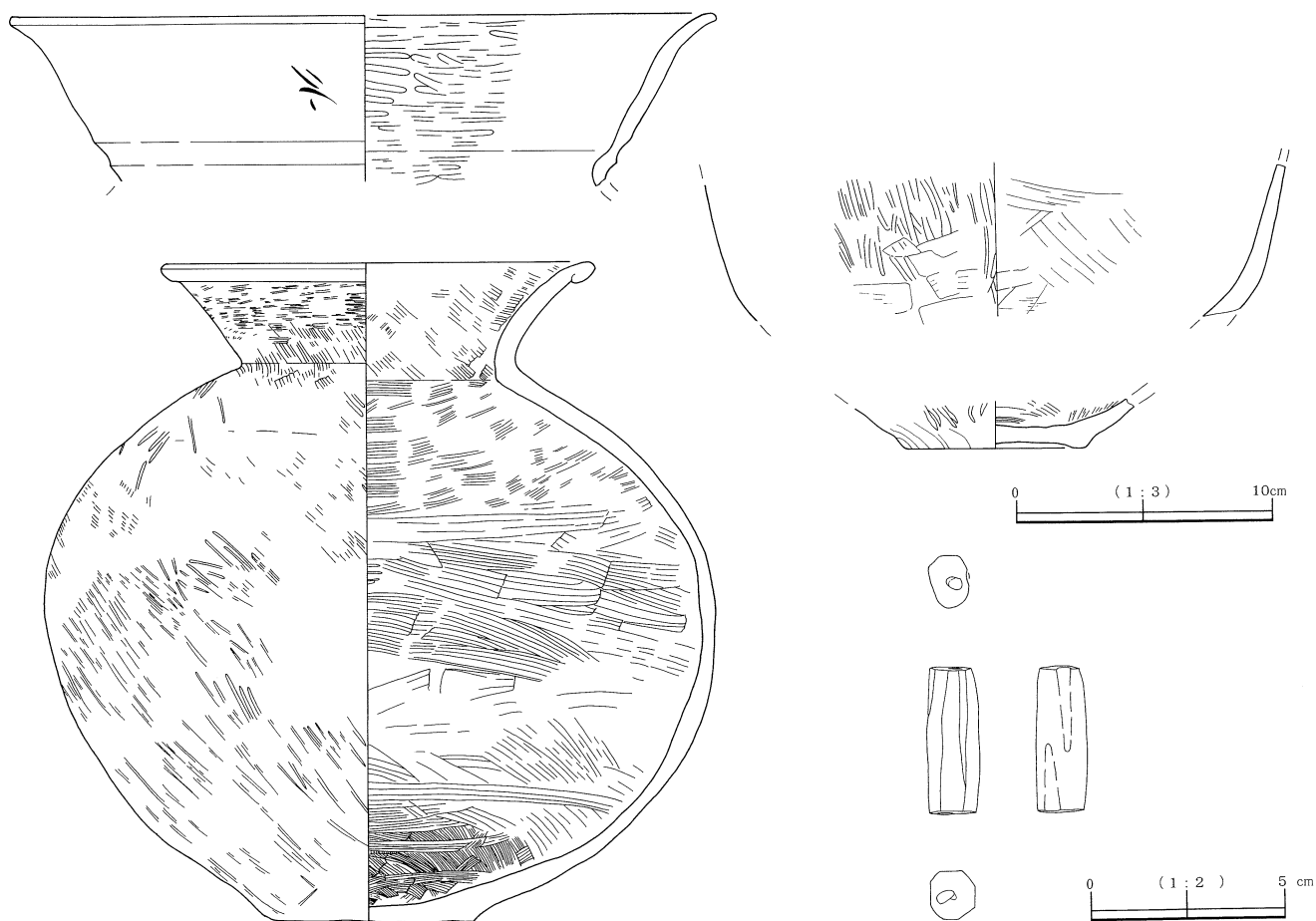
住居跡年代は古墳時代初頭から中期にかけてのものであり、過去の末法遺跡調査成果の範囲に納まるものであった。

【末法遺跡】

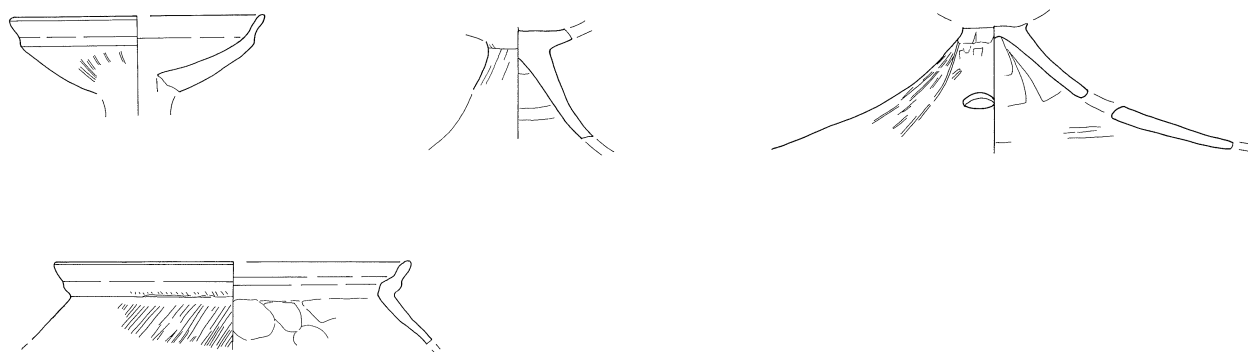
甲斐市東部、荒川扇状地内には東西二本の微高地がある。この内東側微高地の末端部分に築かれた末法遺跡は今回で6回の調査を数える。すべて宅地造成に伴う公道箇所調査であるため広範囲に確認する事が不可能であり詳細な内容を把握するまでには至っていない。その中であって1次調査1号住居跡、2次調査1・3・4号住居跡、3次調査3号住居跡からは比較的まとまった土器資料が出土している。(第24～27図)



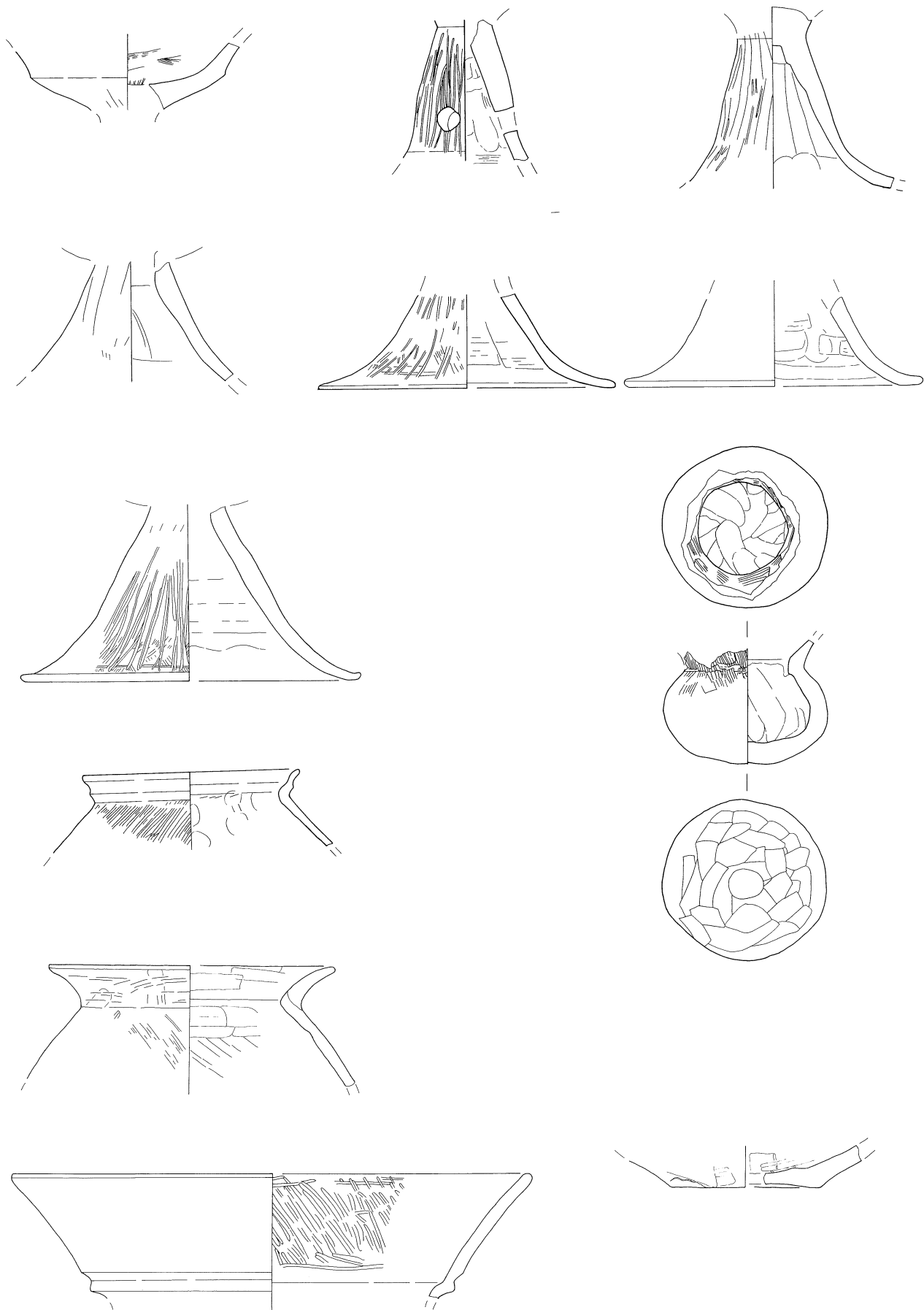
第24図 第2次1号住居跡出土遺物



第25図 第2次1号住居跡出土遺物



第26図 第2次3号住居跡出土遺物



第27図 第2次4号住居跡出土遺物

これまでの調査成果内容のうち、住居跡の年代別軒数をまとめると次の通りとなる。

4 世紀初頭	3 軒
4 世紀前半～4 世紀中頃	1 軒
4 世紀中頃～4 世紀末	2 軒
4 世紀末～5 世紀前半	9 軒
5 世紀第 2 四半期～5 世紀第 3 四半期	6 軒
9 世紀後半	1 軒
時代不詳	1 軒

末法遺跡ではこれまでに23軒の住居跡が調査され、その結果から古墳時代前期から中期を中心に営まれた集落であることが明らかとなってきた。古墳時代中期の集落遺跡は本県でも比較的数量が少ないため、特に土器など貴重な資料を提示することとなった。なお、3次調査、6次調査では完成した石製管玉が各1点出土し、さらに2次調査では上下から孔が穿たれているがずれて貫通していない管玉1点と珪化凝灰岩のチップがまとまって出土している。これらの事は本集落が玉造りに関係していることを示唆するものであり、今後調査を行う上で注視していく必要があろう。

写真図版



1 第5次 調査区全景 東から



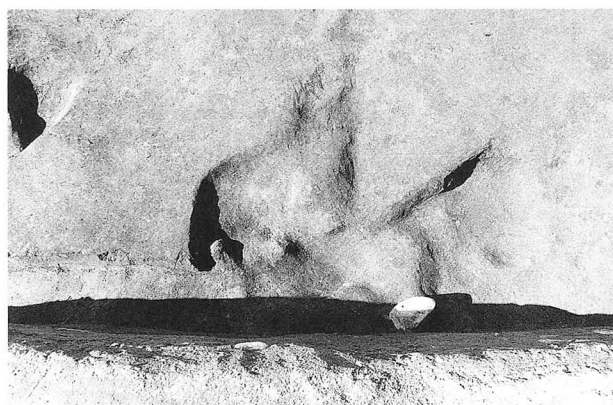
2 第5次 調査区全景 西から



3 第5次 1号住居跡 北から



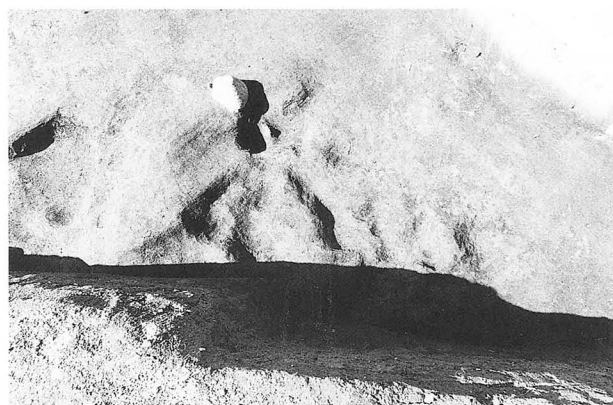
4 第5次 2号住居跡 南から



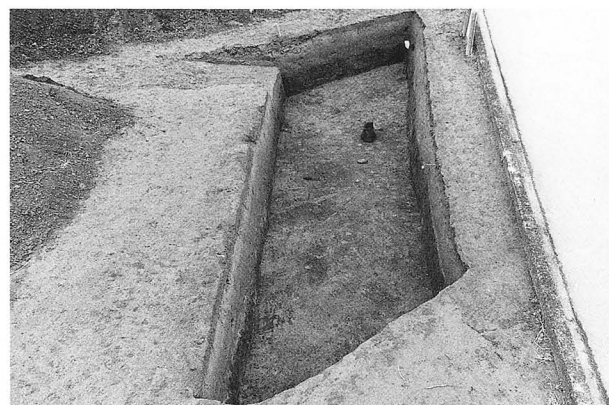
5 第5次 1号土坑跡 東から



6 第5次 窪地1 北から



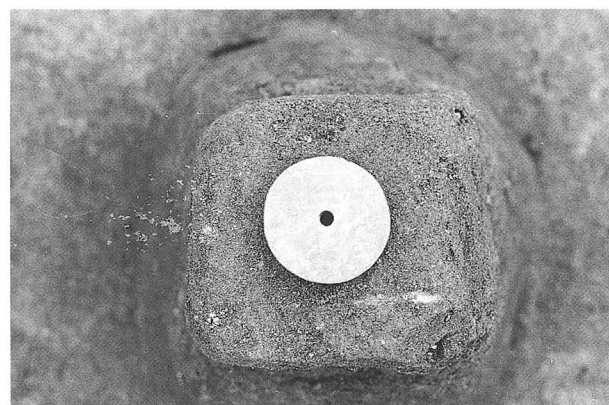
7 第5次 窪地3 東から



8 第5次 第2トレンチ 南から



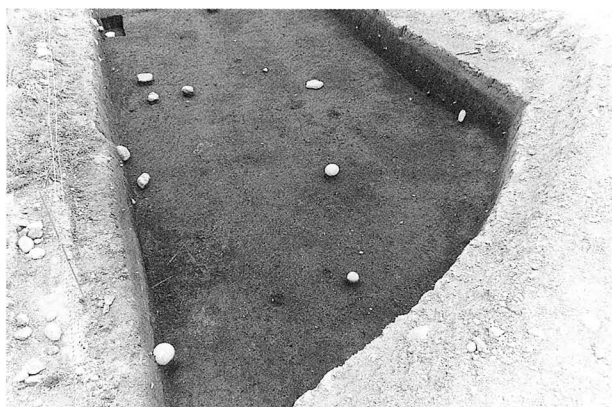
9 第5次 第3トレンチ 南から



10 第5次 第2トレンチ遺物出土状況



11 第6次 調査区全景 東から



12 第6次 1号住居跡 西から



13 第6次 2号住居跡 東から



14 第6次 3号住居跡 南から



15 第6次 4号住居跡 南西から



16 第6次 1号住居跡遺物出土状況



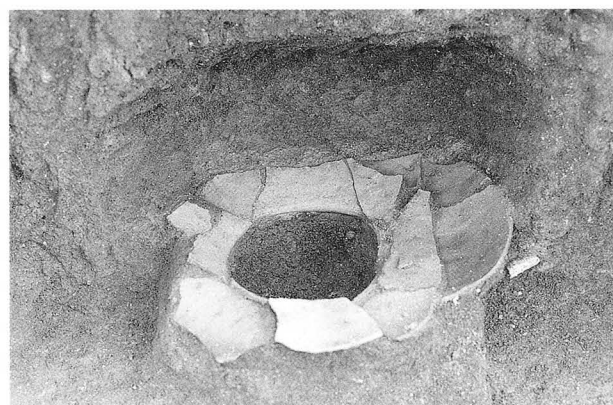
17 第6次 1号住居跡遺物出土状況



18 第6次 1号住居跡遺物出土状況



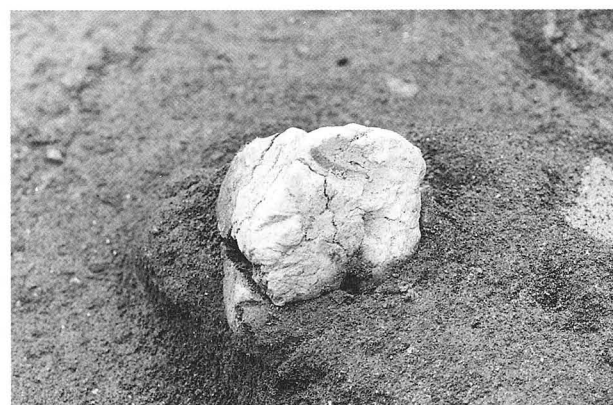
19 第6次 2号住居跡遺物出土状況



20 第6次 3号住居跡遺物出土状況



21 第6次 3号住居跡遺物出土状況



22 第6次 粘土塊出土状況



23 第6次 調査風景



24 第5次 1号住居跡-7



25 第5次 1号住居跡-8



26 第5次 1号住居跡-11



27 第5次 2号住居跡-3



28 第5次 2号住居跡-4



29 第5次 2号住居跡-6



30 第5次 1号土抗跡-1



31 第5次 窪地3-1



32 第5次 遺構外-1



33 第5次 遺構外-2



34 第6次 1号住居跡-1



35 第6次 1号住居跡-2



36 第6次 1号住居跡-3



37 第6次 1号住居跡-4



38 第6次 1号住居跡-6



39 第6次 3号住居跡-1



40 第6次 3号住居跡-3



41 第6次 3号住居跡-4



42 第6次 3号住居跡-6



43 第6次 4号住居跡-1



44 第6次 4号住居跡-2



45 第6次 遺構外-1

報 告 書 抄 録

ふ り が な	まっぼういせき							
書 名	末法遺跡Ⅴ・Ⅵ							
副 書 名	宅地造成工事及び集合住宅造成工事に伴う古墳時代の発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	甲斐市文化財調査報告書							
シリーズ番号	20							
編 著 者 名	大 島 正 之							
編 集 機 関	甲斐市教育委員会							
所 在 地	〒400-0192 山梨県甲斐市篠原2610							
発 行 年 月 日	平成24年〔西暦2012年〕 3月30日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まっぼういせき 末法遺跡 (Ⅴ)	山梨県甲斐市 大下条412-1 外	19210	敷-5	35度40分 20秒	138度31分 40秒	平成23年 1月12日 ～ 平成23年 3月2日	155㎡	宅地造成
まっぼういせき 末法遺跡 (Ⅵ)	山梨県甲斐市 大下条383 外	19210	敷-5	35度40分 21秒	138度31分 36秒	平成23年 5月25日 ～ 平成23年 6月30日	96㎡	集合住宅 造成
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
末 法 遺 跡	集落跡	古墳	住居跡 土 坑	土師器	古墳時代			

甲斐市文化財調査報告 第20集

末 法 遺 跡 Ⅴ・Ⅵ

発 行 日 平成24年（2012年） 3月30日
 発 行 甲斐市教育委員会
 山梨県甲斐市篠原2610
 TEL (055) 278-1697
 印 刷 株式会社 少 國 民 社

